

全国少年警察学生ボランティア研修会

(北海道から中部地方まで)

2019年9月5日(木)



公益社団法人全国少年警察ボランティア協会

全国少年警察学生ボランティア 研修会

●日時 令和元年9月5日（木）午後1時00分～午後5時

●会場 グランドアーク半蔵門（東京都・千代田区）

●主催 公益社団法人全国少年警察ボランティア協会

●後援 警察庁

公益財団法人全国防犯協会連合会

●助成 公益財団法人日工組社会安全研究財団

●総合司会進行

公益社団法人全国少年警察ボランティア協会

事務局長 高橋 和歩

●参加者 全国の学生ボランティアを委嘱している都道府県（北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、東京、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川、新潟、山梨、長野、静岡、富山、石川、岐阜、愛知、三重から、大学生ボランティア、関係者および担当警察職員124名

【目次】

主催者あいさつ	公益社団法人全国少年警察ボランティア協会理事長	山田 晋作	…… 1
来賓あいさつ	警察庁生活安全局少年課長	村上 尚久	…… 2
講演	「少年相談から見た少年たちの事情」 警察庁指定広域技能指導官 警視庁生活安全部少年育成課主査	原 俊明	…… 4
パネルディスカッション			
第1部 意見発表			…… 14
	「少年警察ボランティアに参加する意義」～大学生として、今、何ができるか～		
コーディネーター	文化学園大学名誉教授	野口 京子	
パネリスト	東北福祉大学	貝和 大毅	(宮城県代表)
	秋田大学	鈴木 寧々	(秋田県代表)
	帝京大学	青山 広夢	(東京都代表)
	埼玉工業大学	佐藤 璃奈	(埼玉県代表)
	東海学院大学	白木すみれ	(岐阜県代表)
	中京大学	杉浦 幸郷	(愛知県代表)
第2部 ディスカッション			…… 28
講評	公益財団法人全国防犯協会連合会専務理事	田中 法昌	…… 39
閉会あいさつ	公益社団法人全国少年警察ボランティア協会副理事長		
	東京少年補導員連絡協議会会長	関口 充	…… 40
参考資料	全国少年警察学生ボランティア研修会アンケート調査結果一覧 (北海道～中部地区)		…… 41

公益社団法人 全国少年警察ボランティア協会

理事長 山田 晋作氏



本年度の少年警察ボランティア研修会を始めに当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

本日の研修会には、学生ボランティア、学生ボランティアのお世話をいただく都道府県警察少年課担当官及び諸大学の先生方の皆様に、ご多忙中のところ、遠路ご参加いただきましてありがとうございます。

またこの研修会の開催に当たっては、警察庁及び公益財団法人全国防犯協会連合会のご後援、公益財団法人日工組社会安全研究財団のご助成をいただいておりますが、本日は、警察庁から、村上尚久少年課長殿に、公益財団法人全国防犯協会連合会から田中法昌専務理事殿にお越しをいただき、厚くお礼を申し上げます。

さて、少年警察学生ボランティアの制度は、少年の非行防止や健全育成の活動に、少年たちに年齢的にも意識的にも近い大学生など若い方々に参加いただくようにと考えて始められたものですが、現段階で、約3,500人の方に参加いただくに至っております。

少年警察学生ボランティアの皆様は、委嘱或いは登録をされた都道府県警察で、活動の要領や留意点などについて、研修や指導を受けておられると思いますが、活動を続けていく上で、他の地域の活動状況なども知って視野を広げていただくことも大切であり、また励ましにもなると考え、平成18年度から、今回のような研修会を始めました。研修会は、初回は全国規模で行いましたが、2回目からは、全国を東西に分けて1年交代で東日本地域と西日本地域で行って、東日本地域での開催は今回で7回目となります。

皆さんが、ボランティアとして、少年の補導

や健全育成のための活動に携われますと、子どもたちと直に接するわけですから、予期せぬことに出くわして苦勞されることもありますが、その代わりに、子どもたちの笑顔に接したり、子どもやその保護者から感謝の言葉を聞くとか、人々から高く評価されることもあって、同年代の方々との付き合いなどからは得られない満足感も得られるのではないかと。さらに、ご自身も、辛抱強さ、協調性、相手への思いやりなどが身につくといったこともあろうかと思えます。これまでの研修会での意見発表でも、何人もの方がただ今申したようなことを述べておられます。

私たちは、「地域の少年は地域で守り育てる」をモットーに、活動を続けてきましたが、これからも続けて参ります。学業その他でお忙しい中、力を貸していただける皆さん方に感謝いたしますとともに、こころ強く感ずる次第であります。皆さん方のご参加を得て、さらに活動が活発に展開されるよう期待しております。

本日の研修会は、初めに、警視庁少年育成課主査、少年相談専門職員 原 俊明様（警察庁指定広域技能指導官）に基調講演を頂き、いったん休憩後、パネルディスカッションに入り、文化学園大学名誉教授 野口京子様とのコーディネートで、本日参加の学生ボランティアを代表して6人がパネリストとなって、まず意見発表を行っていただきます。つづく第2部では、会場の参加者にも加わっていただき、質疑応答とディスカッションを行います。

本日の研修会が実り多いものとなりますよう、ご協力をお願いしまして、私の挨拶といたします。

警察庁生活安全局 少年課長 村上 尚久氏



ただ今ご紹介をいただきました警察庁生活安全局少年課長の村上です。本日は全国少年警察学生ボランティア研修会にお招きをいただきまして誠にありがとうございます。また、皆さんが学業の傍ら、それぞれの地域で普段から少年警察の活動にご協力をいただき、非行防止あるいは健全育成の分野で一生懸命ご協力をいただいておりますことにこの場をお借りしてあらためてお礼を申し上げたいと思います。

さて、少年非行について申し上げますと、既にご存じのとおり数は減っています。これは少年人口が減っていることもありますし、人口当たりの非行率が落ちていることもあります。統計だけ言うと、昭和58年が戦後最多でしたが、このころに比べると数としては8分の1まで減っている状況です。

では、子どもたちへの対応が楽になったのかということ必ずしもそうではないとわれわれは思っています。特に最近では少年非行・犯罪という観点から見ても、被害という観点から見ても、やはり中身が大きく変わっています。これは皆さんのほうが詳しいと思いますが、例えば30年、40年前、私自身が高校生のころを思い起こしてみると、確かに学校が荒れていました。少年非行が新聞等で報じられる機会も多かったと思いますが、ぱっと見て服装とかで暗に分かりやすかった。大体どういったことをやっているかという、かっぱらいだったりひったくりだったり万引であったり暴行であったりカツアゲだったり。都市部に行くとなむろしている場所があって、そこで補導するという状況でしたが、最近はかなり様変わりしており、その原因の一つはスマホ・SNSです。別の言い方をすると非常に分かりにくくなった。非行なり犯罪という観点から見ても、昔の非行グループは学校に行くとなら10人ぐらいが集まるようなグループがあっ

て、そいつらの動向を警察なり学校で見れば大体の様子はつかめたのが、最近は必ずしも学校単位ではなくて、SNSでつながって、下手をすると隣の県とかもっと遠隔地。それで夏休みになると一緒になって何かやろうぜというようなことで、結び付きが分かりにくくなっています。

被害のほうも同じようなことが言えます。これも言うまでもなくSNS・インターネットで、親も学校も警察も見えないところで、一体全体誰が被害に遭っているのか、そういう被害に遭う危険性が高いかが非常に分かりにくくなっているということがあるかと思えます。

すべて警察で対応できるわけではありませんが、当然われわれ警察のほうでも警察庁、それぞれの県警本部、各署で中身が変わったことに応じた啓蒙・啓発、防止策、あるいは検挙に力を入れています。従来手法ではなかなかカバーしきれない部分が多いという話を日々いろいろなところから聞きます。

技術的なことについて、新しいSNSにはどんなものができたのか、TwitterなりFacebook、最近だとTikTok。そういったものがどういうサービスで、どこにどういう問題があるのかはおいおい時間が来て学べば分かりますが、恐らく一番の問題は、どうして子どもたちがネットを通じて悪いことをしようという心になるのか、あるいはお互いに誘ってそういうことになるのか。特に性被害ですが、ネットで見ず知らずの人とやりとりをして、写真を送ってみたり、会ってみたり、そういう気持ちになってしまうのか。子どもたちの犯罪、あるいは被害に遭ってしまうきっかけとなるような考え方、行動様式について、自分たち自身はそういう時代を経験していないので、恐らく現場でもなかなかその辺が十分理解できない。

そのような意味で、年齢が近いだけではなく、文化というか背景なり発達過程、通過儀礼と言ってもいいかもしれませんが、そういったものをご自身が経験して、何で子どもたちがこういう落とし穴に陥るのだろう、何で子どもたちがこういう方向に行ってしまうのだろう、そこに気持ちが寄せられるような皆さんにご活躍いただく部分は非常に大きくなっていると思います。

実際にサイバーパトロールでは、ネット上のいろいろな書き込みを見て、「これは多分こういうことじゃないですか」とか、われわれ大人なり警察官が気付かないようなところから、「この子どもについては注意したほうがいいと思います」、「こういう声掛けをしたほうがいいんじゃないか」と、大変効果的にご協力いただいている例もたくさんあると都道府県警察から報告を受けています。

本日の研修会は、長年少年相談等でご活躍いただいている心理の相談員からの講演、皆さんが参加するパネルディスカッション等が行われると伺っています。この研修会を通じていろいろな知見や悩み、皆さんがそれぞれの場所でやっている経験を共有していただくことは非常に有意義なものだと思っています。本日の研修会が大きな成果を挙げることを祈念しますとともに、本研修会を開催されている全国少年警察ボランティア協会に感謝を申し上げまして私からのあいさつとさせていただきます。



「少年相談から見た少年たちの事情」

警察庁指定広域技能指導官

警視庁生活安全部少年育成課主査 原 俊明氏



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました警視庁少年育成課の台東少年センターで心理の相談員をしている原と申します。本日は北海道から中部地域までの地域からたくさんの大学生の皆さんにお集まりいただき、その前でお話をする機会をいただき、大変光栄に思っています。

実は、私は2007年にもこの研修会でお話させていただいたことがあります。その時の内容を読み返してみたところ、当時と今とで考え方はあまり変わっておらず、同じような考え方で今も仕事をしていると感じました。進歩がないじゃないかと言われそうですが、考え方が変わっていないのなら、当時の原稿を今回もそのまま読んでしまおうかとも思ったのですが、そういうわけにもいきませんので、本日はまた新たな気持ちでお話をさせていただこうと思います。

皆さんそれぞれの地域で活動されていますが、それぞれの地域の実情によってさまざまな役割で、名称もそれぞれ付けて活動していると思います。活動内容には違いはあるのかもしれませんが、少年たちのために活動してくださっているという点では共通だろうと思います。

警視庁でも大学生のボランティアが街頭補導とか学習支援、さまざまな体験活動、立ち直り支援活動をしてれています。またそれとは別に、犯罪などの被害体験をした少年に対して継続的かつ個別に支援する被害少年サポーターというボランティアがありますが、その中でも大学生が何人かいます。このように警視庁でも大学生の皆さんに大変お世話になっています。

■自己紹介

少し自己紹介をさせていただきます。普段私は少年相談という仕事をしています。大学で心理学を学び、卒業して警視庁に採用され、それ以後、非行等のさまざまな問題を抱えた少年や保護者、学校の先生など関係者の方々からお話を伺いながら、どうしてこういう問題が起きてしまったのか、それを解決していくためにはどのようにしていけばいいかということについて、相談者の方とご一緒に考える、そういう仕事をしています。

警視庁では少年センターと呼んでいますが、都内には少年センターが8カ所あります。これまで私は、主に少年センターで勤務してきました。少年センターの活動を大ざっぱに申しますと、少年補導、少年相談、そして少年の立ち直り支援に関わるさまざまな活動です。その活動は、皆さんのような大学生ボランティアとか、他にも地域のボランティアの皆様にご協力をいただきながら進められています。

■少年相談

私は少年相談を専門に受けるという仕事をしており、1年間で延べ数百件の少年相談を受けています。どのような問題に関する相談かということ、皆さんも想像がつくと思いますが、一番多いのは、盗み、性非行、家出、無断外泊、暴力等の非行に関する相談です。それから、家庭内暴力とか家の中のお金を何度も持ち出して浪費してしまう、あるいは親子の折り合いが悪くて、親子げんかが繰り返されて困っているという家庭内で起きている問

題です。次に、校内暴力とか不登校等の学校で起きている問題です。また、いじめとか犯罪等の被害に遭い心身が傷つけられて日常生活に支障を来しているような被害に関する相談もあります。このように非常に多岐にわたった相談を受けています。

本日は私がこれまで経験してきた事例を念頭に置きながら、「少年相談から見た少年たちの事情」というテーマで、問題を抱えている少年たちの、その問題の裏にある少年個々の事情に目を向けながら、皆さんが少年たちに関わっていくときにどのような関わり方ができるだろうかという点について、ヒントにさせていただけるようなお話ができればいいなと考えています。

私は普段は小さな相談室で、1対1とか1対2で話し合いをする、対話をするということをしていますので、こういう大きなところで大勢の皆さんに一堂にお話しするのはあまり慣れてはいませんが、皆さん遠いところから集まってきていただいていますので、頑張ってお話をさせていただきたいと思います。

皆さんが今の活動の中で関わっている少年、以前関わりを持ったけれど今はちょっと切れてしまっている少年、あるいは街頭で声を掛けた少年とか、そういう少年の中で印象に残っている少年がいるのではないかと思います。そういう少年に対して、どのように声を掛けてあげたらよいのかなとか、これからどのように対応していけばいいのかなという点で、皆さんのヒントになるような話ができればと思います。なお、話の途中で簡単に事例に触れることがあるかもしれませんが、個人情報特定されない形で話しますが、事例の話はこの会場の中だけの話ということでご理解いただければと思います。

■学生ボランティアになった理由

私が日ごろどんなふうに関わりを進めているかということから話していこう

と思いますが、その前に、皆さんはなぜ警察のボランティアになったのかということについて興味があります。将来の職業選択にも関連しているのかなと思いますので、恐縮ですが、挙手でお答えいただければと思います。

将来、警察官になりたいと思っている方はどのくらいいますか。全体の6割くらいの方が手を挙げてくださいました。結構いらっしゃいますね。では、スクールカウンセラーとか警察の心理職等の対人援助の仕事をしてみたいと思っている方はどのくらいいますか。1割くらいですね。学校の先生になりたい方はどのくらいいますか。1割くらいですね。最後に、一般企業に就職しようという方はいかかでしょうか。これも1割くらいでしょうか。ご協力ありがとうございました。きっと皆さん将来の志望と今のボランティア活動とが何かリンクしているのではないかと思います。そして、それが皆さんが警察ボランティアになった事情かなと思います。

■非行の背景にある少年の事情

ところで、少年たちも非行に走ってしまった事情があります。私が少年相談を進めるときは、非行などの問題行動の背景には、少年たちのどのような事情があるのだろうかということを探っていきます。その少年はなぜ非行をしてしまったかということを考えていくわけです。

皆さん、ここで少し想像していただきたいのですが、「ある中学生がお店で飲み物と食べ物を万引しました。では、その中学生はなぜ万引をしたのだろうか、どういう事情で万引をしたのだろうか。」ということです。それを想像してみてください。それだけの情報では何も分からないじゃないかということかもしれませんが、情報が少ないからいろいろ想像が膨らむかもしれません。どなたか勇気のある方、こんな事情があるのではないかと発言できる方、いますか。きっと頭にはあれこれ思

い浮かんでいるのですが、この場で思い切って発言するのはなかなか勇気が要りますよね。

では、私のほうでこんな事情があるのではないかという話をしていきたいと思います。

■事情その一、低い規範意識

まず一つ目は、その少年は万引なんて大したことじゃないと思っている。遊び感覚、軽い気持ちで万引をしてしまったかもしれません。別の言い方をすると規範意識が低いということです。やって良いことと悪いことの基準のハードルが低くなっている。ですから、そういう少年に対しては、やって良いことと悪いことを改めてきちんと教えていくという対応が必要になります。

なぜ規範意識が低いのか。理由はいろいろあるかもしれませんが、一つは小さいころからの家庭でのしつけに問題があったかもしれません。皆さんもちょっといたずらしようかなとか、誰も見ていないからいいかななんて思って、出来心で何かしてしまいそうになったことがあるかもしれませんが、そういうときに、やっちゃおうかなと思いつつも、何か胸騒ぎがしたり、どこかで誰かが見ていないかなと気になったり心配になったりしなかったでしょうか。それは何かというと、自分の心の中にあるブレーキです。「やっぱりやめたほうがいいよ」とささやいてくれる心のブレーキです。そのブレーキが作動したからそんな気持ちになるわけです。

ではなぜ、心の中にそのようなブレーキができたのかというと、心理学の理屈で言えば、小さいときに保護者からやって良いこと・悪いことのしつけをきちんとされていく中で、やがて保護者が心のブレーキとして子どもの心の中に住み着いていくわけです。ですから保護者がいないときでも、保護者から「駄目だよ」と言われてきたことはやらなくなるわけですが、規範意識の低い子どもの中にはそ

こら辺がうまくいっていないということがあ
るのかもしれませんが。

■事情その二、心の穴埋め

では、二つ目の事情です。私が以前担当してたケースですが、「盗みをする心と心の穴が埋まるような感じがする」と言っていた少年がいます。その少年は心の穴を埋めるために盗みをしている。一瞬埋まるのですが、またあいてきます。ですから盗みを繰り返してしま
う。では、その少年の心の穴はどうしてあいてしまったのか。その少年の生育歴をたどっていくと、やはりすごく寂しく育ってきた。一定の保護者から養育を受けることができず、繰り返し親戚等に預けられたりして、いろいろな事情があって寂しく育ってき
てしまった。そういう中で心に穴があいてしまったのかなと思われる少年でした。我々はその少年の心の穴を埋めていくように対応していくのですが、なかなか難しいところがあって、最終的には児童養護施設で適切な養育を受ける形で落ち着いていきました。

ところで、その少年は物を盗んでいたわけですが、本当に物そのものが欲しかったか
というと、そうではないようにも感じます。それよりは、大人の愛情とか関心を買いたか
った。それを得ることができないので、その代わりに物を取ってしまったということでは
なかったのかと思います。

こうした心理は盗みに限ったことではあり
ません。例えば暴力を振るう子は、暴力を振
るう相手が憎くて暴力を振るっているのか、
そういう場合もあるかもしれませんが、本
当はもっと違う相手に反発したい、反抗した
いのだけれどそれができない。そこで代わり
に目の前にいる相手に暴力を振るっている
こともあるかもしれません。虐待を受けて
きたような子どもが、本当は小さかった
とき、自分の親に対して異議申し立てを
したいんだけどそれはできなかった。そ
して中学生ぐら

いになり反発できるような力を得たときに、もともと心にくすぶっていた反発心が親とは別の人に向けてしまった。例えば学校の先生とかに向けてしまうということが起きることもあります。このように、非行行為の背景には本当は何があるのか。その少年は本当にそれをしたくてやっているのか。というところを見ていくのも大切な視点かと思えます。

■事情その三、児童虐待

三つ目は、今触れましたが、虐待のような環境に置かれていて、食べるものもろくに与えられていなくて、おなかが減って食べ物や飲み物を万引したということがあるかもしれません。皆さんも警察でいろいろと研修を受けるときに話を聞いているかもしれませんが、警察官は補導活動の中で補導した少年の背景に虐待のようなことがないかということにも敏感に対応しています。そのような視点も必要です。折しも虐待で亡くなった東京の5歳の女の子の裁判が始まってそのニュースが流れているさなか、今度は鹿児島で4歳の女の子が亡くなるという痛ましい事件が起きていますが、そういうことが背景にありはしないかということも少年に対応していくときにとっても大事な視点となります。

ここまでお話ししてきた三つの事情は、家庭の中における少年の抱える事情になるかと思えます。ほかにも万引した事情は考えられます。

■事情その四、子どもの貧困

次は、四つ目の事情ですが、その少年は友達と一緒に遊びに行き、友達と同じようにお菓子とか飲み物を買ったかっただけでも、経済的に苦しい親からは小遣いがもらえない、それで思い余って万引をしてしまったという背景もあるかもしれません。

今、「子どもの貧困」がニュースになること

があります。また、「子ども食堂」というのを聞いたことがあると思いますが、経済的に困窮している家庭の子どもに対して安価な形で食事を提供するような子ども食堂が全国で増加しているという実態があります。ただ、子ども食堂というのは貧困への対策だけではなくて、地域の活性化という目的も兼ねているようですが、いずれにしても、そのような、社会の景気の動向とか経済的背景が少年の非行の背景となる場合もあります。こういふことに対してわれわれが、あるいは皆さんがどう対応できるかというとなかなか難しいところではありますが、そういう背景もあるということです。

■事情その五、いじめ被害

五つ目の事情です。もしかしたらその少年は自分より強い友達とか怖い先輩から「盗んでこい」と脅されたのかもしれません。いじめという状況でこのようなことが発生し、さらに追い込まれていった場合には、自殺等の深刻な事態も引き起こしかねない問題です。いじめの発見とその防止については教育現場においても常に課題として取り組まれているところだと思えますが、そういう視点も持って少年に対応していかなければなりません。

■事情その六、少年自身の資質

最期にもう一つ、六つ目の事情に触れておきます。少し別の視点に移りますが、その少年は性格や考え方に偏りがあり、自分自身の欲求には忠実で、欲しいものはどうしても欲くて自分の衝動を抑えることができないのだけれども、自分が盗んだことで被害を与えてしまった人の気持ちとか、少年のことを心配している親等の気持ちに対してはすごく無頓着になっている。このように少年自身の資質が問題の背景要因となっている場合もあります。

こういう場合、周囲の人たちを非常に困らせますが、よく考えてみると少年自身も自分の衝動を自分では抑えられず、その結果として問題行動を繰り返していることとなりますので、少年自身もつらい状況に置かれていると言えます。そして、このようなケースでは医療との連携も必要になってきます。

ここまで、盗みという一つの非行を例として、少年たちの抱える事情について考えてきましたが、こうした事情の中には、少年個人の問題というものもありますが、それだけではなく、今少年が置かれている社会や環境の中にある問題が鏡のように映し出されていると感じさせられることがしばしばあります。

■共感的理解

このように、少年たちの抱える事情について考えていったとき、私は、もし私自身が子どものころ彼らと同じような事情を抱えていたらどうだっただろうと想像することがあります。私は決して立派な環境で育ったわけではありませんが、非行や犯罪に走るほどの事情は抱えずに済んで、これまで過ごしてこれたのかなと思います。でも、いままで見てきたような事情をもし私が抱えていたとしたら、私も彼らと同じように非行に走ったり問題を起こしていたかもしれない、万引をしていたかもしれないと思います。そして反対に万引をしている彼らが私が育ったぐらいの環境に生まれていれば、彼らは非行に走らず普通に社会人になれたのではないかと思います。

そう考えると、私が日ごろ対応している非行等の問題を持っている少年たちと、この私自身の間には大した差はないのではないかと。私と彼らが入れ替わっていたとしても全然おかしくないのではないかと考えてきます。相談やカウンセリング等の対人援助の仕事の基本として「共感的理解」があります。相手の立場に立って相手のことを考え、相手の気持ちを察して共感的に感じるということですが、

今いる自分と少し環境や事情が違っていれば非行は自分の身に起こったかもしれないと想像することができれば、この「共感的理解」はそんなに難しいことではないのだろう。そのように想像することができれば、非行等の問題を抱えている少年のことを我がこととして、もしかしたら自分の身に起こったかもしれないこととして考えていくことができるのではないかと私は考えています。

■自立を促す働き掛け

こうした少年たちの抱えている事情は、簡単に解決できない場合が多いかと思えます。少年の抱える事情にはそのまた事情があったりするわけです。例えば虐待をしている親は親自身も虐待されていた場合が多いということが言われています。そうすると事情を延々とさかのぼっていかねばなりません。でもそれはできません。あるいは、お酒ばかり飲んでいてなかなか仕事をしない保護者がいたとします。そういう保護者がお酒をすぐにやめられるかというとなかなかやめられないかもしれない。働かない保護者はなかなか働かないかもしれない。事情はなかなか変えられない。解決するのは難しい。解決するにはわれわれの手には余る、そういう問題もあるわけです。子どもの貧困にも触れましたが、景気を回復して貧困問題を解決することも一個人ではとてもできることではありません。

少年の問題・非行の背景には事情があるという話をして、でもその事情はなかなか解決できないと今申し上げているわけですが、ではどうすればいいのか。

少年相談で私が目標の一つとしていることは、少年たちが自分ではどうすることもできないこうした事情を抱えながらも、自分にとってどういう選択が正しいか、今自分はどうすべきか、悪い誘惑に耳を貸すのか、それとも耳は痛いけど正しい忠告に従うのかという自分の将来を左右するような時に、自発的に自

分にとってプラスとなる判断ができ、そして実行していける。このような自立した人間に成長していけるように促していくということです。これを、少年相談の目標の一つと考えています。

■少年の話をよく聞く

それは難しそうに聞こえるかもしれませんが、実は、少年たちとの関りをとおして、私たちにもできることだと考えています。少年たちと関わっていく中で、少年の口から「やっぱり俺学校行こうかな」とか、「友達や先輩とつるんで悪さをしていても、結局いいことないんだな」とか、「親はうざいけれど、でもやっぱり自分のことを心配して叱ってくれてるのかな」とか、そういう言葉が出るように、うまく話を聞いていってあげる、少年の心の中に、正しい判断力とか自立の芽を少年と共に見つけていく、そういうことではないかと思えます。それは、「こうすればいいんだよ。こんなことは駄目だよ」と教えていくのではなく、少年自身にそれを見つけさせる、そういう関わりをしていければ少年たちは次第に自分にとって正しい選択ができるようになって、自立していけるのではないかと私は考えています。

そうするためにはどうすればいいのかということですが、これはよくいわれていることですが、相手の話をよく聞くことだと思います。しかし、これは簡単そうで意外に難しいのかもしれませんが。われわれは人の話を聞くよりは、自分の考えを話すことに慣れていきます。ですから相手にいろいろと教えたいくなるわけです。「こうしたほうがいいよ」とか、「そんなことをしても自分のためにならないよ」とか、「みんな君のことを心配しているんだよ」ということを一生懸命教えたくなくなってしまいます。もちろんそういう話も大事ですが、そういう話はずっと後ですればいいのだと思います。少年がそういう話を聞いてくれ

そうなタイミングで言えばいいのだと思います。その前にやはり話を聞くことがすごく大切なのだらうと思います。

少年の話を聞いていくと、言い訳をしたり、不満を言ったり、怒りを表したり、あるいは不安な気持ちをほのめかしたり、悲しみや苦しみを吐露したり、いろいろあると思います。それを一生懸命聞いていく。そういう話を聞いていくというのは聞いている方がつらくなることもあるかもしれませんが、そういうときは、それを後で、ボランティアの仲間とシェアして、お互いに感じたことを話し合ったり、または、警察の職員に相談して、アドバイスをもらえばいいと思います。そうすることで、少年の話を聞いたことで生じた辛さは軽減していくでしょうし、次にはもっと良い聞き手になれるかもしれません。

■うなずき話を聞いてくれる相手

誰かに話を聞いてもらうということはとても大切なことだと思います。そのことを著名な精神科医の中井久夫さんの本の中に見つけました。「世に棲む患者」という本ですが、その部分を抜粋してご紹介したいと思います。

人間というのは一人で生きられない。物質的にもそうですけれども、精神的にも一人で生きられないというところがあります。誰か一人でも聞いてくれる人がいれば、随分精神健康が違うということが、恐らく精神医学以前どころか医学以前からあった事実ではないか。少しゆとりのあるほうの人がゆとりのない人の話を聞くということは、恐らく有史以前からあったのではないかと思います。

それを非常に痛切に感じましたのは、インドネシアにまいりましたとき、ある晩、そちらで日本人がただ一人で英語も通じないところに行っていて働いている、そういう第一線のセールスマンや技術者の人たちと席を共にする機会があったのですけれども、そのとき私が非常にびっくりしたのは、「一人で奥地へ行く

というのは、一日仕事が終わったらとにかくひとり言を言わなければいけない」と言うのです。普通の社会におりましたら、ひとり言をしょっちゅう言っている人間というのは少し精神健康が危ないほうに数えられる。ひとり言とか徘徊とか、どっちかという病気がぽいと、精神科の病気の証拠にも数え上げられています。しかし奥地に入るとひとり言を言わないといけない状況になる。WHOの関係者で西アフリカとか英語の通じないような国へ行っておられたドクターがその話に賛成しまして、「そうだよ、そうだよ、ひとり言を言わなければ、それはもう狂っちゃうよ」ということを言うわけです。

どういうひとり言を言うかということ、仕事を終えて早くホテルに帰ってきて、誰も待っていないわけですがけれども、まず風呂に火をつけてから、自分に言って聞かせるそうです。「ああ、おまえは今日もよくやった。われながら85点はやってもよかろう。さあ、今から故郷に手紙を書いて、風呂へ入って、日本の歌でも聴いて寝るとするか。あしたはこういう仕事が待っているからな」と、こういうひとり言。これは声を出して言わなければ駄目だそうです。それを恥ずかしいと思って黙っているとだんだんおかしくなってしまう。

なるほどと思いました。私は精神科の固定観念としてひとり言を言うほうが病気がぽいと思っていたのですが、壁に向かってでも話をするということは、話をしないよりもよいのだということを強烈に教わったわけです。それまで私は精神科の医者として壁に向かって話をしている方をたくさん見てきたわけですがけれども、その場合、人間に話す勇気が持てないのか、あるいは人間が怖くて壁に話される方であるから病気なんだけれども、壁しかないときには壁に話すほうがよくて。しかし、それが人間の顔をしてうなずくべきところであらうなずいてくれる者であればさらにいいわけでございます。

と述べられています。このように話を、相

手が思うことを自由に話してくるその話を、聞いてあげることがとても大事なのだと思います。

■少年の意外な一面、命の輝き

そして、話をずっと聞いていくと、やがて自分の好きなこととか、自分の得意なこととか、そういうことを話してくれるようになってくる場合があります。皆さんもそういう経験があるのではないのでしょうか。

誰でもそうですが、人は外からは分からない意外な面を持っているものです。そういうことは最初からは見せてくれない。私が相談を担当していた夜遊びを繰り返す中学生の女の子の家へ、ある時必要があって家庭訪問しました。そうしたら、その子は自分の部屋でクラシック音楽を大きな音で聞いていました。それまでの彼女からは全然想像ができなかった。なぜクラシック音楽を聞いていたかということ、小さいころバレエを習っていたそうです。バレエ音楽がとても好きで、バレエ音楽を聞いていました。そんな姿を私に見せてくれる中で、その少年との話が少し深まってきました。

盗みを繰り返している高校生の男の子がだんだんいろいろと話をしてくれるようになっていく中で、「自分は小学校時代の友達と銭湯巡りをするのが好きなんだ」という話をしてくれたこともあります。非行を繰り返していたわけですが、そう語る少年の中に、何かほっとできるようなものを見つけられたような気がしました。

中学校で校内暴力を振るっていた男の子は、話しているうちに「バスケットボールがとても好きで、友達とバスケットボールをしているときが一番楽しい」という話や、「将来はペンキ屋になりたい」という話をしてくれるようになりました。彼を支えていけるものが彼自身の中にあるということが実感できて力強く感じたことを覚えています。

今まで気付かなかったけれど、その少年には得意なことがあるんだ、そんなことが好きなんだというような話を、少年がしてくれたという経験が皆さんにもあるかもしれませんが、そういうときに少年たちの表情を注意して見ていると、少年たちは一生懸命話をしてくれると思います。楽しそうだったり、うれしそうだったり、そういう表情をしていると思います。最初に不平とか不満とか怒りとか悲しみを語っていたときの表情とは全然違う表情をして語っているのではないかと思います。私はそういう表情を見ていると、「この子の個性がすごく発揮されているな」とか、大げさかもしれませんが、その子の命の輝きみたいなものを、その子らしさを感じます。

体の病気のときには体自身が免疫力を持っていて、自己回復力を発揮することがあると思いますが、心も同じなのだろうと思います。そういう話を少年たちができるようになっていく中で、少年たちの中に心の回復力が芽生えてくるのではないかと思います。

少年に限りませんが、誰でも心の回復力を持っていて、まずは吐き出したいことを吐き出し、訴えたいことを訴え、それを表現した後には胸のつかえが少し取れて、心に少し余裕ができて、そして心の回復力が芽生えて、先ほどのような言動が見えるようになるのではないかと思います。

こういうときに少年を取り巻く事情、環境は何も変わっていないかもしれませんが、子どもの中に輝きや自立の芽が見え始める。そういうことが子どもが回復に向かうためのステップとして大事なのではないかと私は考えています。

■体験活動の意義

少年の中に変化を促すために私はカウンセリングをしているのですが、皆さんに協力をいただいている体験活動、補導活動も、少年たちに変化をおこさせる触媒として作用して

いるのではないかと考えています。

少年は意外に狭い世界に住んでいます。私が担当していた不登校の中学生の男の子は、厳格な家庭に育って、食事中はテレビを消して、会話をしてはいけないという家庭でした。その子が友達の家遊びに行ったら、夕ご飯をみんなで楽しそうに食べている。「こういう家庭もあるんだ」というのを中学生になって初めて知ったと言っていました。自分の生まれ育った環境、自分の身の回りの友達関係しか知らないで、自分の経験してこなかったことは知らないわけです。世の中とはそういうものだ、家庭というのはそういうものだと思い込んでいた。けれども、そういう少年たちにいろいろな体験活動を経験してもらって、これまでしなかったような新しい体験をします。大人が親切に教えてくれる、助けてくれる、指導してくれる、そういうことももしかしたらあまり経験していない少年たちもいますから、すごく新鮮な驚きとして感じるかもしれません。

体験活動の「折り紙教室」で折り紙をまず自分が習って、それを今度は小さな子どもたちに教えるという経験をした少年もいます。そのときに小さな子どもたちから感謝される。それがすごく新鮮だし、うれしいし、「自分も捨てたもんじゃないんだな」と感じる、そういう初めての経験になる。あるいは農作業をして、収穫したものを一緒に食べる。「こんなにおいしい温かいものをめったに食べたことがない」、しかも「みんなで食べるとおいしい」ということを初めて感じる。地域の清掃活動をして、落書きを一緒に消したり、捨てられているごみを一緒に掃除したりする中で、すごくさっぱりした気持ちになるかもしれないし、掃除をするという経験を通して、「こんなに汚れてる」、「こんなに汚しちゃうのはよくないな」と、落書きをされた人の立場に初めて立つ、自分の視点が変わる。少年たちは、そういう活動を通して、今まで知らなかった新しい経験を通して新しい世界を知っていく。

それが体験活動の意義の一つだと思います。こういう活動が触媒となって少年たちに変化を促していくのだらうと私は思います。そして、その場に一緒に寄り添ってくれている皆さんの存在そのものが、少年たちにとって大きな力になっているのではないかと思います。

■少年の良きモデル、大学生ボランティア

大学生の皆さんは、少年たちにとって、思春期にいろいろあっても、最終的には何とかかなるということをも身をもって体現しているお手本ではないかと思っています。心理学に「モデリング」という言葉がありますが、自分がお手本としたい人の行動を観察してまねしていく、その行動パターンを学習して自分の行動を変えていくという意味ですが、まさに大学生ボランティアの皆さんは少年たちにとってよきモデルになっているのではないかと思います。

そういうお兄さん・お姉さんたちを見て、自分はいろいろ失敗して問題を起こしたり悩んだりしているけれども、お兄さんやお姉さんたちと同じように自分も大丈夫かもしれない、ああいうふうになっていけるかもしれない、そういう安心や勇気、そして将来の見通しを少年たちに与えることになるのではないかと思います。少年たちに寄り添うこと自体にそういう意味もあるのではないかと思います。

さまざまな活動を通して少年たちから「ありがとう」、あるいは「楽しかった」という言葉を掛けられることもあるのではないかと思います。その言葉の重みを感じてもらえればと思います。また、皆さんが少年たちにそういう影響を及ぼしているのだということを実感していただきたいと思います。

これは継続的に活動したときだけに得られるものではないと思います。私の先ほどの話しぶりでは何回も少年に会って話を聞いていく中で少年の気持ちがほぐれて次には夢や希

望を語りだす。というように聞こえたかもしれませんが、決してそういうことではなくて、たった1回の触れ合いの中でも、「あのときお兄さんに言われたあの一言が」とか、「あのお姉さんの励ましの一言が」とか、そういう言葉が少年の中に掛け替えのないものとして残っていることもあるはずです。そういう話も私は聞いたことがあります。ですから、どんな言葉掛けを子どもたちにしていけばいいのか、一生懸命考えてよりすぐりの一言を掛けていただけたらと思います。あるいは、一生懸命考えたものではなく、直感的に出てきた言葉もすごく重みがある場合もあるかもしれません。そういう一言を、一つの関わりを、子どもの中にあたかも一つの種をまくような種を置いていくような気持ちで関わっていただければいいのかなと思います。

■ボランティア活動のその先

最初の問いに戻りますが、なぜ皆さんはボランティア活動をしてくださっているのでしょうか。皆さんは、ボランティアを通して何をしようとしているのか、何を得られたのでしょうか。私は思うのですが、問題を抱えた少年と関わって、その問題の背景にあるさまざまな事情に触れた皆さんが今後社会人となっていくときに、少年の問題の背景にある事情そのものに取り組めるような、そういう仕事をしていただけたら素晴らしいことではないかと思っています。

学校の先生になろうとしている人はいじめや差別のない学校を築いていこうとする教師になっていくかもしれないし、警察官になろうとしている人は犯罪の取り締まりはもちろんですが、犯罪の裏にある事情に目を向けていくような警察官になっていくかもしれない。あるいは企業に就職しようという人は、経済のことだけではなくて、経済と人々の安心とか安全とか幸せの両立を気に掛ける、そういう企業人になっていってくださればと、ボラ

ンティア活動を通して得たものをそういう形で花開かせていただけたらと私は思っています。

私は、これからも一人一人の少年に目を向けて、地道な活動を重ね、微力ながら頑張っ

ていきたいと思っています。聞きづらいところもあったかもしれませんが、私が今日皆さんにお話ししたかったことは以上です。これでお話を終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



「少年警察ボランティアに参加する意義」 ～大学生として、今、何ができるか～



■コーディネーターあいさつ
文化学園大学 名誉教授
野口 京子氏

野口 皆さん、こんにちは。野口です。これから全国少年警察学生ボランティア研修会を、学生ボランティアからの支援に焦点を当てて、意見発表、そして、ディスカッションを行っていききたいと思います。

毎年このシンポジウムは開かれています。今回は、学生という立場でどのような支援ができるか？ 現状はどうなっているのか？ 年々発展し、非常に重要な戦力となっている学生ボランティア活動について、今年度の発



表をしていただきます。何を、どのようにという具体的な支援の在り方と、少年たちが変わっていった様子を、発表から実感していただきたいと思います。

先ほど理事長からのご紹介にありましたように、私は、この活動の立ちあげを担ったということで、本日、司会をするのがとても楽しみで、うれしく思っております。学生ボランティアの数が増えていくということは、もっと大きな力になっていくということです。今日会場にいらっしゃるメンバーの方は、発表の方に託していらっしゃると思いますが、それぞれいろいろな考えをお持ちだと思います。後ほど質疑応答の時間を設けます。できるだけ効率よく進めていきたいと思っています。

まず、発表する方の意見を十分聞かせていただきたいと思いますので、すぐに始めたいと思います。

1部では、1人10分ほどで今までの活動をまとめたものを発表いただき、2部では、それに基づいてディスカッションという形にしていきたいと思います。それぞれの団体の活動を述べていただき、皆さんには、支援の在り方について考えながら後ほどのご意見に備えていただきたいと思います。

最初に貝和さん、お願いします。

■パネリスト意見発表

東北福祉大学 貝和 大毅（宮城県代表）
秋田大学 鈴木 寧々（秋田県代表）
帝京大学 青山 広夢（東京都代表）
埼玉工業大学 佐藤 璃奈（埼玉県代表）
東海学院大学 白木すみれ（岐阜県代表）
中京大学 杉浦 幸郷（愛知県代表）

■ポラリス宮城の活動

貝和 私は大学生による少年健全育成ボランティア「ポラリス宮城」の貝和大毅です。本日はどうぞよろしくお願いします。



この写真は今年の6月に開催されたポラリス宮城の結団式と団旗です。まずポラリス宮城について紹介します。ポラリス宮城は、お兄さん・お姉さんの立場から少年を見守るボランティアとして平成16年に発足しました。今年も東北福祉大学をはじめとする宮城県の7大学50名の学生がポラリス宮城に登録し、活動しています。私は2年生から登録しているので今年で3年目です。

ポラリスというのは「北極星」を意味します。昔の航海士の北極星のように、少年たちの道しるべとして輝き、少年たちの目標となるボランティアでありたいという願いが込められています。活動としては街頭補導活動や

立ち直り支援などの少年の非行防止および健全育成に資する活動となっています。活動は、大学ごとに警察署と連携して実施する班活動、そして他大学の学生と共に行う全体活動があります。

まず班活動について説明します。こちらは街頭補導です。大学ごとに分かれて、警察署が実施する街頭補導活動や非行防止活動、立ち直り支援活動に参加しています。私の所属する東北福祉大学では、宮城県の仙台北署と活動しています。こちらの写真は夏休み前の時期に、少年課の警察職員、少年補導員と街頭活動を実施した様子です。カラオケボックスや駅の駐輪場を巡回しています。

こちらの写真は幼稚園で行われた「非行防止教室」です。少年補導員と共に人形劇をやりました。友達に暴力を振るわない、万引しないことなどを子どもたちと約束しました。幼稚園生のころからこういう活動は非常に意味のあることだと思ったので、私も大学生としてもっと積極的に参加していきたいと思いました。

私の地区ではありませんが、ほかの地区の活動も発表したいと思います。少年補導員に指導していただいて、児童館で子どもたちと一緒にたこづくりなどをしています。左下は仙台大学でのスポーツ大会の写真です。右上は地域のお祭りで非行防止ブースをつくり、キャンペーン活動をした写真です。右下の写真は、警察署で支援している少年と共に農業体験をしたときの写真です。

■児童養護施設訪問

次に全体活動についての写真です。全体活動としては児童養護施設訪問や七夕づくり活動、キャンペーン活動を行っています。

児童養護施設訪問の様子を紹介したいと思います。この写真は直接子どもたちと触れ合うことができ、学生たちも楽しんでいました。左下の写真を見てください。こちらはポラリ

スの先輩がつくってくれた「健全育成かるた」です。絵は手描きですので、一応世界一のかるたとなっています。取り札はA3判の大きさなので、体育館でも遊ぶことができます。昨年末、2カ所の施設を訪問し、「健全育成かるた大会」を行いました。未就学の子どもから中学生までが参加しています。かるたの前にみんなで「じゃんけん列車」というじゃんけんを使った遊びも行いました。じゃんけんをして負けた子が後ろにくっつくゲームですが、年齢の差もなくできたため非常に盛り上がりました。健全育成かるた大会では、読み札を読む係と小さな子どもとチームを組む学生としてかなり盛り上げました。熱戦を繰り広げ、チームを組む学生は、子どもたちが飛び込まないように見守りました。後日、施設からお礼の手紙をいただいて、「また遊びに来てね」と言われたときは非常にうれしかったです。

■七夕づくり

続いて七夕づくり活動の写真を紹介します。仙台は七夕が有名ですが、皆さんご存じでしょうか。今年は8月6日から8日まで開催されて、約220万人が来場したそうです。ポラリスは少年サポートセンターと協力して、平成27年から七夕づくりをしています。私が参加した去年の七夕づくりの写真を紹介します。今年は5回作製しました。支援する少年の中には小学生の男の子がいて、私をお兄ちゃんと慕ってくれて、いつも一緒に作業を行いました。下の写真は出来上がったことを祝っている写真と、ちょっと上にあるのは私と一緒に活動している子どもの写真です。作業を進めるときに、初めはこの少年は私のことを警戒していてあまり話も弾まなかったのですが、活動の終盤に向かってだんだん会話も弾んできて、楽しく活動することができました。

完成した七夕飾りは、仙台七夕まつり会場に飾られ、たくさんの人に見てもらいました。こちらが写真です。警察署の人から、「作業に

参加してくれた少年は、ポラリスや少年補導員に褒められてとても喜んでいたよ」と言われました。参加した私たちも大きな祭典で七夕づくりを披露することができてうれしく思いました。この活動は地元の『河北新報』にも写真入りで大きく掲載されて、ネットニュースにも載ってうれしかったです。今回は時間の都合上紹介できませんが、申し訳ありません。

■少年警察ボランティア宮城大会

次の写真は、今年の7月31日にやった「令和元年度少年警察ボランティア宮城県大会」です。今年はハンドベルを演奏しました。このハンドベルは昨年度、宮城県防犯協会連合会により贈呈を受けたものです。季節の歌として「たなばたさま」、そして「世界に一つだけの花」を演奏しました。短い練習時間ではあったのですが、最終的には上手にできたので非常によかったですと思います。ハンドベルによる音楽療法というのは、ストレスで病んだ心や体の症状改善等の効果が期待されています。

私たちも今回演奏してみて、ポラリスのみんなの心が一つになったような感じを受け、達成感を得られました。子どもたちと一緒に演奏したいと思っています。冬にはまた児童養護施設訪問があるので、子どもたちを交えてハンドベルを演奏するなどして活用したいと考えています。

次は県大会の写真です。宮城県の防犯合言葉として「まけないよ」があります。「ま」は万引しない、「け」は携帯で遊ばない、「な」は殴らない、「い」はいじめない、「よ」は夜遊びしない。こちらは震災があって大変な思いをしたのですが、少年たちも負けないよという心を持って、非行・震災に負けない強い心を持ってほしいという思いを込めてつくりました。

下の写真は今年つくったときの七夕写真で

す。

活動を振り返ってみると、登録学生は50名いますが、時間が合わず、なかなかみんなが集まって活動することはできませんでした。それでも活動できる人が活動に取り組んだ結果、ポラリス宮城は年々充実していていると思います。

最後に昨年の活動報告会での感想を紹介します。「活動に参加する中で、少年たちにとって兄という存在であるため、自分から積極的に動くことや考えることが必要だと感じた」という話がありました。また、「補導員さんと活動することが少年たちと接するときのお手本で、学ぶことができた」という声もあります。

活動してみて感じたのは、この活動を頑張ることが未来の宮城県の子どもたちにとっても非常に意味のあることだということです。子どもと目を合わせ、一緒に活動していくことで少年たちのポラリスとなり、健やかな成長を少しでも手助けできたらうれしく思っています。卒業も近づくのですが、今後も大学生という立場を生かした活動を計画し、実施していきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

野口 貝和さん、どうもありがとうございました。では、続きまして秋田県代表の鈴木寧々さん、よろしくお願ひします。

■秋田県の活動

鈴木 鈴木と申します。よろしくお願ひします。私は特にパワポとか写真は用意していないので、お話だけ聞いていただければと思っています。

まず初めに、テーマとされている「少年警察ボランティアに参加する意義について」話



していきたいと思います。私にとって参加する意義としては、私自身の自己成長や社会性の向上につながるとともに、対象となる少年の自己肯定感や自己有用感を高め、結果的に共生社会の実現を可能とするものだと考えています。

私自身、将来への志望として、教育学部で学んだ者として共生社会の実現に向けた仕事をしていきたいと考えています。共生社会というのは共に生きる社会ということで、誰もが自立し、社会参加に貢献して、活力のある生活を送ることができるようにも間接的でも支援していきたいと考えています。

大学の先輩の勧誘を受けて少年警察学生ボランティアの存在を知りました。また、大学の就職情報室にもボランティアの掲載があったので、興味を持ち、参加しようと考えました。一番の参加の動機としては、もちろん勧誘を受けたのもありますが、私の中学校が結構荒れていて、少年院や鑑別所に入った友達もいたので、そういう人たちがどういう考えを持っているのだろう、どういうことを生きがいとしているのだろうという素朴な疑問から、普段関わる機会のない非行少年たちの立ち直り支援を行うことによって知見が広がるだけでなく、物事を多角的・多面的に考えることができるのではないかと考えて参加しました。

■農業体験などを通して共感

少年警察ボランティア活動としては、私は去年、大学3年生から活動しているので、参加回数としては数えるほど、5回ぐらいしかなくて、正直自信を持って話す内容はないのですが、主に参加した活動としては、農業体験や薬物乱用防止キャンペーンの広報活動、「秋田竿灯まつり」の巡回を行いました。

ボランティアをやって本当によかったと思うこととしては、少年と共に参加した農業体験において、食物を育てる苦労や食物の大切

さを共感することができたとともに、少年から「楽しかった」、「参加してよかった」という言葉を聞けたときにうれしさがあふれて、ボランティアに参加してよかったなと感じています。

広報・啓発活動に参加して考えられることとしては、たとえ善意であっても独善的なものになってはいけなくて、やはり同じ立場に立って、こっちが支援しているという考えではなくて、その人の気持ちを第一に考えて、人としての尊厳を傷つけないように、原さんもおっしゃっていましたが、相手の心に耳を傾けることが大切なんだと考えています。

学生としてどの程度関わっていいのか、関わったほうがいいのかというところが私としてもとても難しく、少年の家庭事情とか非行歴は、少年も闇を抱えているというか、重い雰囲気を出してしまうので、そういう事情に関しては触れずに、年齢が近いということもあって、何げない会話、趣味や特技、最近ハマっていることなどを話して話題を広げていくことで自然と親近感が湧いて、少年の緊張感や心が和らいで居場所づくりにつながっているのではないかと考えています。

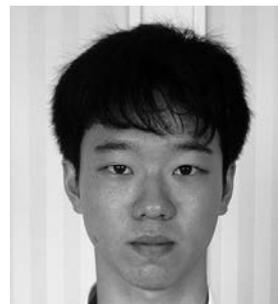
触れ合う少年たちを見て気付いたこととしては、心のどこかに寂しさや悲しみを抱えているということが一番だと思っていて、誰かがそばにいる安心感や、もっと自分らしくいられる環境が欲しいというのが少年たちの一番の願いではないかと私は考えているので、少しでも私の言葉掛けやボランティア活動の雰囲気が少年たちにとってプラスの方向に向いていけばと考えています。

私は将来警察官にはなりません。教育学部にいるので本来は教師になるべきですが、少年に限らず、年齢も関係なく苦しみや悩みを抱えている人たちは世の中にもっと多くいると思うので、私は会社で言うと日本赤十字社に勤めて、人道的支援を通して少しでも他者の気持ちを和らげて安心・安全を提供できればいいなと考えています。以上です。

野口 ありがとうございます。それでは次に移ります。東京都代表の青山さん、よろしくお願いします。

■東京・警視庁大学生少年補導員

青山 皆さん、こんにちは。私は帝京大学法学部法律学科4年生の青山広夢と申します。本日はよろしくお願いします。



まず初めに、私が所属している警視庁

大学生少年補導員のボランティア組織について紹介します。警視庁大学生少年補導員の制度は、平成28年度に発足し、今年で3年目を迎えようとしています。総勢約160名の大学生が、都内8カ所にあるいずれかの警視庁少年センターに所属し、さまざまな活動を行っています。ちなみに私は都内の西側のエリアを主に担当している立川少年センターに所属し、そこには約30名の大学生が在籍しています。

次に、少年警察ボランティア参加の動機についてお話しします。私の将来の志望は警察官として安全で安心した社会を実現することです。その中でも社会的弱者といわれている青少年や女性・高齢者を狙った犯罪を取り締まり、よりよい社会の実現を目指していきたいと考えています。少年警察は、警察官になった際に携わりたい部署の一つでした。そこで、警察官を志す者として自分に何かできないかと思い、警視庁のホームページで掲載されていたボランティアに応募することになりました。

続いて活動の概要を紹介します。主な活動内容は、街頭補導、農業体験、折り紙教室といった青少年健全育成活動や非行防止活動などです。街頭補導活動では警察官、地域の補導員と大学生補導員が協力して夕方の時間帯

に街頭パトロールを実施します。喫煙など、不良行為対象者を発見した際には補導を行い、注意を促し、再発防止に努めます。そのほかに立ち直り支援活動の一環で野菜の苗植えから収穫までを行う農業体験や餅つき大会などのイベントも開催しています。

■農業体験から素直な子どもの一面を見る

続いて、こうした活動を通じて感じたことについて紹介します。立ち直り支援活動の農業体験でのエピソードを踏まえてお話しします。ある日、小学校中学年の男の子が農業体験に参加してくれました。その日、トウモロコシの収穫を予定していましたが、農場に到着したときの少年はやる気がなさそうな様子でした。私はその少年に対して声掛けをしながら収穫作業を始めました。すると少年の気持ちがほぐれていく様子が分かり、最初はやる気がなさそうにしていた少年が、最後には笑顔で野菜の収穫を楽しんでいる様子へと変わっていきました。こうした農業体験を通じ、素直な子どもの一面を見ることができました。

しかし、このような立ち直り支援活動は、やったからといってすぐに子どもたちがよい方向に改善していくとは限らないと考えています。少年たちとのコミュニケーションや、社会性を身に付けてもらうための一つの手段として継続的に実施していくことが大切だと考えます。当たり前のことですが、青少年一人一人が抱えている問題は違います。ですから、個々の青少年の性格や生活環境の背景を配慮し、対話していくことが大切だと感じました。

ここで立ち直り支援活動の様子が分かる写真を紹介します。今スクリーンに映し出されているのは、青少年が苗から一生懸命育てた収穫前のトウモロコシの写真です。こちらは実際に収穫をしているときの様子の写真です。こちらは青少年が実際に幼稚園や保育園を訪れて、折り紙教室で園児たちに折り紙の折り

方を教えている様子の写真です。こちらは、クッキーをつくるイベントを少年センターで開催し、小学校の女の子が一生懸命つくっている様子です。このようにおいしそうにすることができました。

最後に、大学生としてできることを、自分の考えを伝えて、報告を終了させていただきます。私が大学生としてできることは、青少年と年齢が近い大学生がよき話し相手となり、話がしやすい環境づくりを担うことだと考えます。実際に大学生が立ち直り支援活動に参加すると子どもたちはとても喜んでくれますし、たくさん話し掛けてくれます。子どもたちに、大学生がいるから次回行われる立ち直り支援活動やイベントに参加しようと思ってもらえれば、大学生として大変うれしいことだと思います。今後も積極的に街頭補導活動や立ち直り支援活動に参加し、少しでも子どもたちの役に立つことができるよう尽力します。ご清聴ありがとうございました。

野口 青山さん、どうもありがとうございました。それでは続きまして、埼玉県代表の佐藤さん、よろしくお祈いします。

■埼玉県学生ボランティア「ピアーズ」

佐藤 皆さん、こんにちは。私は埼玉県から来ました埼玉工業大学人間社会学部心理学科4年、佐藤璃奈と申します。本日は埼玉県警察少年非行防止学生ボランティアを代表し、私がこれまで参加した活動を通じて感じたこと、また気付いたことなどをお話ししたいと思いますので、どうぞよろしくお祈いします。



私が参加している学生ボランティアの愛称は「ピアーズ」です。英語で「同世代の仲間」という意味です。非行や不良行為を行う少年

たちと年齢が近く、またその気持ちを理解しやすい私たちのような大学生ボランティアが少年たちのお兄さん・お姉さんという立場で声を掛けたり見守っていきこうという趣旨から名付けられました。

現在ピアーズは22の大学から59名の学生が委嘱され、活動しています。主な活動の内容としては、県警の職員と一緒に学習支援や農業体験、また、料理教室や織物教室などの物づくり体験、さらに浦和レッズをはじめとしたプロスポーツ選手の協力を得て「非行防止スポーツ教室」等を行っています。また、キャンペーン等、非行防止教室のアシスタント、街頭補導活動など、少年の健全育成を目的としたさまざまな活動にも参加しています。

私はピアーズの活動は今年で2年目になります。もともと私が大学生のうちにできることって何だろう、何かしたいなと考えていたときに大学でピアーズの募集のポスターが目に入り、ピアーズが大学生だからこそできるボランティアだということを知り、興味を持ちました。ピアーズの活動はまさに大学生の力を発揮できる場所だと思っています。現在私は大学で心理学の勉強をしています、大学の勉強もこのボランティアの活動で少年たちとの触れ合いの中に生かしていけたらいいなという思いで今年も参加しています。

■大学で授業やスポーツを実体験

それでは、昨年私が参加したボランティアの中で一番心に残っている活動を紹介したいと思います。私がピアーズの活動に参加してしばらくたったころ、少年課の人から「ボランティア活動を自分で企画してみないか」という声掛けをしていただきました。それまで私は、少年課の人が企画してくれたボランティアにお手伝いのような気持ちで参加していたのですが、まさか自分で企画するとは思ってもよらず、お話をいただいたときは戸惑いもありましたが、次第に自分の企画したもので

子どもたち、少年たちに何か喜んでもらえたらいいなという気持ちが湧いてきました。そして、大学生にしかできないことって何だろうとか、どんなことをしたら子どもたちの心に響くのかという部分に重点を置きながら、私なりのボランティア活動を企画することにしました。

私が実際に考えて企画したのが、現在私が通っている埼玉工業大学で少年たちに大学での授業やスポーツを実際に体験してもらいたい、そこから何か学んでもらいたいというものでした。その少年たちは今回初めて大学に来たという子が多かったように、少年たちはまだまだ知らないことがたくさんあります。将来の夢を見つけるためには、いろいろなことを知り、聞いたり体験することが大事だと私は思っています。私は、この体験を通して少年たちが経験や知識を少しでも広げ、自分の夢や目標を見つけてもらえたらいいなという思いで企画しました。

実際に企画した内容は、まず「大学ってどんなところ？」という素朴な質問に答える自己紹介と質問コーナー。次に、「心理学のテストで自分を知ろう」という性格診断、心理テスト。そして「全国レベルを体感しよう」という卓球教室を行いました。

協力してくれたピアーズの仲間が、大学ってこんなところだよという自己紹介と、学部や学校の内容の紹介をしました。少年たちは初めは恥ずかしさもあるようで、質問はほとんど出てこなかったのですが、次第に慣れてくると和やかな雰囲気ですべての質問コーナーをすることができました。

心理テストでは心理学科の教授に協力していただき、少年たちと一緒に「バウムテスト」という紙に木の絵を描く心理検査をやらせてもらいました。この体験では自分のことを知るという意味があって、バウムテストを通じて自分にはどんな強みがあるのかとか、どんな性格傾向があるのかを知ってもらいたいという思いがあります。みんな自分の描いた木の

絵を見ながら解説を聞き、一喜一憂して盛り上がりました。大学でしかできないような勉強ができるということを知ってもらえたのではないかと思います。

最後に、本校ではインターハイにも出場し、活躍する卓球の選手がいるのですが、その人たちから卓球の指導をしてもらいました。卓球部の中学生が参加していたため、全国レベルの選手との練習にみんな真剣な表情で指導を受けてくれました。それがとても印象的でした。この体験学習では、初めは緊張していた子どもたちも最後には自分から話し掛けてきてくれて、夢を教えてくれたり、楽しかったという感想を言ってくれたりもしました。自分で企画したものにそういうふう言ってもらえたことがとてもうれしく、またボランティアとしてのやりがいを感じる活動となりました。この体験学習を通じて少年たちには、大学ではさまざまな分野の勉強があり、また自分の学びたいことが学べること、将来みんなが輝ける場所が必ずどこかにあるということが伝わっていたらうれしいと思っています。

■みんな普通の子

私はピアーズを通じてボランティア活動をする中で、少年はみんなどこにでもいる普通の子だということに気がきました。中には、もしかしたら非行がある少年や家庭環境に問題がある少年がいたかもしれませんが、自分が接している中ではみんな普通の子で、「あっ」と思うことは全然なかったです。私は少年の非行防止に大事なものは、少年を型にはめて見ないことではないかと思っています。誰でも失敗することはあると思います。その失敗で悪い子と決め付けてしまえば、少年たちが生きづらくなってしまわないかと思っています。私は少年がもし何かアクションを起こしたときには、「どうしてそう思ったの？」と少年の考えを聞いて、少年の気持ちに寄り添うようにしたいと心掛けています。誰でも自分に関

心のある人に話しやすく、親しみやすいと思うからです。

最後になりますが、大学生ボランティアとして何ができるのかについて私の意見をお話ししたいと思います。私の考えは、私自身が企画した大学での体験学習にもつながっています。ピアーズでのボランティア活動は、初めは話し掛けても何の反応もない少年も結構いるのですが、私自身が楽しそうにしているとだんだん打ち解けて、最後の別れ際には手を振ってくれたり、楽しかったと言ってくれる子がほとんどです。大学生は中学生や小学生にとってそう遠くない未来であり、少年たちにとっては想像しやすい未来ではないかと思っています。

私はこのような活動を通じて、私たち大学生がいろいろなことに一生懸命取り組んでいて楽しそうな姿を少年たちに見せることによって、少年たちが想像する未来が少しでも明るくなるのではないかと考えています。ですから、私はできるだけ自分が大学生である今、何をしていて、何ができて、どう楽しいかということ少年との触れ合いの中で伝えていくことを意識して活動しています。

大学生ボランティアとしてたった数日の関わりでできることはきっと少ないと思います。しかし、私が少年たちの心の中に今日は楽しそうな大学生と交流できたなという時間や印象を残していくことで、少年たちの未来への希望を与えられているのではないかと考えています。これからもボランティア活動を通じて自分自身も少年たちと一緒に成長していくつもりで積極的に参加していきたいと思っています。本日はご清聴ありがとうございました。

野口 佐藤さん、ありがとうございました。続いて岐阜県代表の白木さん、よろしくお話しします。

■岐阜県防犯ボランティア「アイリス」

白木 皆さん、こんにちは。岐阜県から来ました東海学院大学2年生の白木すみれです。よろしくお願いいたします。今日は防犯ボランティアを通じて私が感じたこと・学んだことを中心に話したいと思います。内容としては今までと視点が違ったりするのですが、聞いていただければ幸いです。



まず私が所属しているアイリスについて紹介します。現在アイリスは発足して3年目で、私は2年目から参加しています。アイリスは防犯ボランティアの一つで、小学校や中学校へ行き「情報モラル教室」を開いています。内容としては、ネットの危険性やSNS上のトラブルに関することを大学生が実際体験したことなどを交えて話すことで、スマホの依存やSNS上のトラブル、犯罪について訴えます。そして保護者に対してはKDDIからフィルタリングの話などをします。ただ話すだけでは伝わりにくいし、聞いているほうも飽きてしまうので、アニメーション動画を使うなど工夫をしています。打ち合わせのときにはお互いに、自分のSNS上の失敗談や友達の失敗談を話しています。驚く内容が多々あり、私は毎回驚かされています。

■サイバー防犯ボランティア

7月からはもう一つ、岐阜県のサイバー防犯ボランティアの委嘱がありました。インターネット上の違法有害情報を見つけて報告するボランティアです。こちらはまだ経験が浅く、違法有害情報を見つけることに苦戦しています。しかし、探せば探すほど出てきます。ネットやスマホの恐ろしさを感じました。

次は活動を通じて感じたこと、気付いたこ

とについて。まとめると、「教えることは学ぶこと」です。私はいつも教える側、伝える側で小学生や中学生の前に立ちます。しかし、逆に私が学ぶこと、知ることがあります。分かりにくいと思いますので、具体的な例を述べながら説明します。

まず一つ目、携帯を持っているかを質問をしたとき、小学生は4割ほどが挙手をしました。1年生から6年生までと幅広く、自分が小学生のときとは全く違います。小学生が携帯を持つことすら当たり前の時代になったのでしょうか。私は当時メールを打つことにとっても苦戦していましたが、今の小学生はビットコイン、LINE Pay、ゲームの課金など、さまざまな言葉を知っていました。これがギャップを感じたものの一つでした。

そして、実際にあった身近な出来事について。私はスマホゲームはあまりしないので、課金で50万を超えたとか、書き込みには気を付けているので不適切な投稿をしたとかはなく、SNS上のトラブルについて説明されてもあまり関心はありませんでした。しかし、実際にあり得ることだと、身近に起きていることだとアイリスに入ってから気付きました。アイリスのメンバーや友人の体験談を参考に小中学生に話す内容を決めているからです。ここに書かれていることも私が聞いた実際に起こったことです。

次に携帯を使ったやりとりは誤解を招きやすいということ。私たちのコミュニケーションは三つの種類があります。「メラビアンの法則」をご存じでしょうか。初対面の人間を認識する割合は、言葉そのものの意味・話の内容などの言語的コミュニケーションが7%、声の質・話す速さ・声の大きさ・口調など準言語的コミュニケーションが38%、見た目・仕草・表情・視線など非言語的コミュニケーションが55%であるというものです。携帯の場合は画面越しであるため、言葉そのものの意味や話の内容など言語的情報のみで判断していくことになります。これは親しい者同士

のやりとりであっても同じことが言えるでしょう。大学で学んだことと一致した瞬間、私はより一層友人にメッセージを送るときには気を付けるようになりました。

幾つか挙げた例のように、私は情報モラル教室を通じて自分も学んでいることに気が付きました。実際に気付いたからこそ、学んだからこそ冷静に判断できた場面が多々あります。携帯で漫画を読むことにはまり、続きを見るにはお金が要するときのことです。続きを見たいと強く思って数百円を使い、もう一度数百円分ならとお金を使おうとしたとき、ふと思いました、「これって自分が情報モラル教室で言ったことと同じじゃないのか」。ふと気付いたら50万も使っていたなんてしゃれにならない。私は踏みとどまりました。これは知っていれば防げるトラブルだと思います。

生徒との年齢に近い大学生が行う意義は内容を身近に感じやすい。一方的に話すのではなく、共感を持てる参加型ということです。そもそもアイリスが発足された理由の一つですので、なるべく近い目線で親しみをもちてもらおうように伝えます。

■今後したいこと

今後の活動では大きく三つしたいことがあります。一つ目は、より多く情報モラル教室を開くこと。「情報モラル教室と言えばアイリス」と言ってもらえるぐらいアイリス活動を広げていきたいです。これが少年たちのSNS上などの無用なトラブルを未然に防ぐことにつながればいいなと思います。

二つ目が、大学生をたくさん巻き込むこと。大学生だからといって正しい情報モラルを持っているとは限りません。一緒に学んでいくのです。その機会を提供することがアイリスの役目だと思います。そして三つ目が、海外で学生と交流する中で世界の情報モラル教育事情を知ること。以前オーストラリアに留学したとき、私が通っていたオーストラリアの

学校では1日かけて情報モラル、防犯、交通安全、犯罪などについて研修をしていました。テレビに関しては年齢に応じたガイドライン、メイキングスキームというものが広く認知され、情報モラルでは違反した場合は裁判ざたになることがあり、実際日本人留学生が訴訟された例もあります。比べて日本においてはこのようなフィルタリングが甘いと思います。今の日本の事情からすると、各個人が自覚を持ち、フィルタリングや情報モラルをいま一度確認しないとはいけません。私はその手助けをすることもボランティアの一つだと思います。

さらに私は今月2週間、日独学生青年リーダー交流事業の派遣団員としてドイツに行きます。そこではドイツの学生とディスカッションをしたり話をしたりする機会もあるので、ドイツ事情についても聞いてみたいです。

行動したくても大学生も忙しく、勉強もレポートもバイトも、人によっては自動車学校にも通っています。他県の大学のことは分かりませんが、私の大学ではボランティアは公欠になりません。自分で時間をつくっていくしかありません。もしかしたら数回しか参加できないかもしれないし、定期的にボランティアに参加できないかもしれません。でも、それでもいいと思います。自分のペースでやっていけばいいと思います。私たちは学生であり、勉強を優先しても責められはしません。

自分の大学ではボランティア情報が掲示板に掲示されるのみで、大学側の理解が得られているのかは微妙ですが、生徒はボランティアのサークルを立ち上げるなど仲間を集い、手探りの状態ではありますが少しずつ行動しています。今何ができるのか、まずは行動を起こすこと。いつも協力してくれる警察官は、新たにやりたい活動があれば教えてほしいと積極的になってくれます。何も大学生だけで解決していけと言われていたわけではありません。一歩ずつ踏み出して巻き込んでいきましょう。

今日一緒に岐阜県代表として来た学生も私が巻き込みました。今後は大学が忙しくなり、実習も入るのでなかなか思うように活動ができないかもしれません。ですが、自分なりにできる精いっぱいのことをやっていき、アイリス1期生が築き上げたものを引き継いで、次の世代に渡していきたいです。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

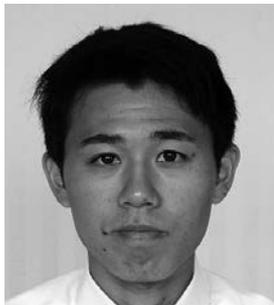
野口 白木さん、どうもありがとうございました。それでは最後の発表になります。愛知県代表の杉浦さん、よろしくお願いします。

■愛知県・ユースサポーター

杉浦 皆さん、こんにちは。愛知県から来ました中京大学法学部法律学科4年の杉浦幸郷と申します。本日私は大きく四つのことについてお話しさせていただきます。一つ目は愛知県少年警察ボランティアユースサポーターについて。二つ目はユースサポーターの活動内容について。三つ目は支援活動の実例紹介。四つ目はわれわれ学生の意識を高める研修会の紹介です。

まずユースサポーターについて説明します。平成17年6月、20名の大学生ボランティア、ユースサポーターアドバイザーとして発足しました。平成23年度からは生活安全部長から委嘱を受けたユースサポーターと名称を変更して、少年警察ボランティアとして活動を行っています。今年度の状況は、委嘱数31名です。内訳はご覧のとおりです。

こちらは昨年度私たちユースサポーターが参加した24の活動です。昨年度は70回、延べ146人のユースサポーターがこれらの活動に参加しました。私は今までに学習支援、農業体験、陶芸教室、スポーツ体験教室、警察関係のイベントの手伝いなどさまざまな活動に



参加してきました。ボランティア活動を行うようになったきっかけは、自分の将来に役立つ、将来に生かせる、社会的に意義ある活動だと思ったなど、警察官志望の私は少年の非行防止・健全育成に携わる活動がとにかくやってみたかったというのが始めた理由です。

活動当初は少年たちの言葉や態度などにも不安を感じながらやっていたことを覚えています。髪を染めている子、ピアスをしている子が活動場所にいたりしますが、話してみると全く悪い子ではありませんでした。見た目では決して判断してはいけないということを経験できた私の経験です。

■少女の高卒認定取得

ここで支援の実例を一つ紹介します。対象少年は現在18歳、高校中退の有職少女です。性風俗店やJKリフレ店で稼働し、友人に対する傷害事件で逮捕され、少年院送致となった少女を少年院退院後、被害少年サポートとして支援中でした。少女は少年院に入院中に高等学校卒業程度認定試験を知り、院内で学習して既に複数の科目に合格しています。少女は少年院退院後も高卒認定取得の意欲を失っていないということから定期的な学習支援を実施し、高卒認定取得を目指す取り組みを始めました。たった一人の支援ですが、この少女の立ち直りが周囲に与える影響はとて大きかったです。

昨年11月、対象少年と今後の進め方などの話をし、支援をスタートしました。少女が合格を目指す科目は4科目。毎週1回のペースで支援を続けていきました。試験本番までは約9カ月と長期にわたる支援となります。学習支援をスタートして間もなく、少年課の人が本人の夢を聞いたとき、「大学に行って保健室の先生になりたい」と少女は話しました。自分が昔不登校気味で保健室登校をしていた際、保健室の先生がいろいろな悩みを聞いてくれた、同じ悩みを持つ子の気持ちを分かっ

てあげられるかもしれないというのが理由です。

支援をスタートしましたが、多くの課題がありました。それは少年院入院中の生活と退院後の生活が全く異なるということです。これは当然のことですが、今は遊びたい年ごろであり、さまざまな誘い、誘惑が支援を邪魔します。運送業のアルバイトと両立しながら毎週1回警察署で行う学習支援、いかにしてモチベーションを下げずに支援を続けられるか。支援のたびに少女と会話し、そのときの状況を把握するようにしました。目標を見失っていきそうなときには、何かしらのアドバイスをして学習に取り組ませました。

少女に家庭学習を短時間でも行うように促しますが、できていない状況が続きます。その対策として、鉛筆を持つての勉強が無理なら、歴史は漫画本を読んで流れがつかめるようにしました。また、ちょっとした時間でもスマホから勉強できるように、10分間歴史動画サイトを紹介し、少女のスマホにリンクを張らせたりしました。

学習支援の指導者はユースサポーターまたは少年課の警察職員が担当しています。警察職員は県教育委員会からの派遣者で、県立学校の現役高校教師です。学習支援を進めていく中で、仕事先の残業で学習の開始時間に間に合わない場合は電話でその旨を伝えてくる、支援開始から一度も休んでいない。これは当たり前なことかもしれませんが、少女にとってかなり大きな成長だと周囲の少年課員が言っています。だから何とかしてあげたい、何とか合格してほしいという気持ちが私たちの中に常にあります。

昨年11月から勉強を始めて4カ月が経過したころ、一生懸命取り組む姿の反面、職場でのさまざまな問題や勉強の進み具合など、少女の内面での葛藤や悩みも垣間見え始めました。当時の少女の風貌はいわゆるギャルであり、中学生の妹もその影響を多大に受けていました。仕事も容姿等に全く気を使う必要

のない職場のため、他人の介入がなければ改善は期待できない状況でした。

今年18歳になった少女に対し、社会人として自立するためには内面や就労意識、資格は重要な要素ですが、見た目で損をしない外見、大人として最低限身に付けるべきマナーも必須条件となります。そこで少女がこれまでの生活で学ぶことのできなかった社会人としての服装などの身だしなみや立ち振る舞いについて、少女自身が意識して変わろうとするきっかけをつくることにし、外見から変身することとしました。少女が変貌を遂げることによって影響を受ける周囲の少女たちの意識改革も見据えた立ち直り支援活動です。

まず服装です。洋服と靴は少年課が子どもの性被害支援でお世話になっている病院の関係者から寄付してもらいました。女性の少年課員とユースサポーターが本人の意見を聞きながら洋服と靴の選択をしました。講師である美容師から髪の色や手入れ方法などさまざまなアドバイスを受け、少女は終始照れながら受け答えをしていました。終了後、髪の色が激変していることに気持ちが落ち込んでいる面がありました。気持ちの落ち込みが激しかったため少女の様子が心配でしたが、約1週間後の学習支援の際、髪が美容師のアドバイスどおりの状態になり、少女は周りからの評判がいいと話し笑顔を見せていたため、安心しました。今回の取り組みが少女自身が意識して変わろうとするきっかけの一つになったと思っています。

■ワークショップの研修会

次は研修会の紹介です。私たちユースサポーターが教養を身に付ける場として、今年度ここまでに2回の研修が実施されました。一つは非行防止教室においてワークショップを行う際、進行役であるファシリテーターの役割を学ぶ研修、もう一つは少年鑑別所の施設見学を伴う研修を行いました。今後は鑑別所

内の少年に運動指導を行うボランティアを行って行く予定です。

ここではワークショップの研修について説明します。研修会では少年課員からの教養の前に、ペーパータワーなどの2種類のアイスブレイクを体験しました。その後ワークショップでは1グループ4～5名に分かれ、現在の青少年の課題は何か、その背景に何があるのかをワールドカフェ方式で、課題を解決するためにユースサポーターとしてどのように活動するのかをKJ法で話し合いを行いました。ワークショップでは漠然とした意見ではなく、課題に対して具体性のある意見が多く、話し合いの内容が充実しているように感じました。各グループの発表では、模造紙への書き込みや付せんの貼り方にグループごとの工夫が見られ、分かりやすいものとなりました。

今後は夏季休養後の2学期に学校において、いじめ防止をテーマとしたワークショップを実践する予定が入っています。このような研修会は学生側の意識を高めるよい場であり、今後も継続して行っていくべきだと思います。

最後となりますが、私はこの活動を通じて実際に警察の人たちの仕事を見ることができたのはとてもよかったです。私が見た警察の人たちの仕事はほんの少しですが、大学生のうちその一端を体験できたのはとてもよい経験になりました。そして少年たちの心境の変化が垣間見られたことがとてもうれしかったです。最初は話してくれなかった少年たちがだんだん話してくれるようになり、笑顔を時に見せてくれたのが私にとってこのボランティアに参加する原動力になりました。

このボランティアに参加して一番よかったと思うのが、自分自身が大きく成長できたことです。私の弱点であるコミュニケーション能力を改善させるきっかけになり、そして実際に大きく成長できました。本研修会で聞いたさまざまな県の取り組みをほかのユースサポーターにしっかり還元、共有し、今後の活動のきっかけづくりとしていきたいです。以

上、私が参加している愛知県の活動に関する報告となります。ご清聴ありがとうございます。

野口 杉浦さん、どうもありがとうございました。これで6名のパネラーの発表を終わりました。よく準備をしていただき、いろいろな活動内容が紹介されて、画像を交えたりしながら体験などを報告していただきました。ボランティアではありますが、心を傾けて一生懸命、学生の皆さんが少年に接している様子が伝わってきまして、胸がじんとする場面もありました。

当初、17～18年前には、夜、危険がないように注意をしながら、大人の補導員の後について一緒に歩き、補導の実態を学ぶところから始めたのですが、今日伺っていると、これほどいろいろなところで工夫した活動の種類が増えてきているということです。かなり専門的な、時代に合わせてサイバーパトロールなどところまでも踏み込んでボランティア活動をやっていますし、また、今日ご出席のパネラーたちのそれぞれの教育のバックグラウンドを生かした活動ができているということで、健全にこの活動が発展していることを、非常にうれしく思いました。

前半は皆さんのお話を伺うということで、その後からディスカッションにしたいと思いますが、まだ5分あります。フロアに埼玉県から先生がいらしているようなのでこの5分の時間に大学からの支援ということでお話をうかがいたいと思います。大学から支援を受けていないけれども頑張っているという学生もいましたが、多分そちらの大学では何か支援があるのでしょうか。私も最初は大学の授業に組み入れるということで苦労しました。ボランティアと授業とは違うというご意見の先生もいらっしゃいますし、その点どんなふうに取り組みられているか、現状をお話しいただけますか。

小野 埼玉工業大学人間社会学心理学科の小野です。専攻が犯罪心理学ということで、県

警にもいろいろな形でお世話になっていて、その関連で学生にピアーズへの参加もいろいろ働き掛けています。大したことは何もしていないのでお話しすることはないので、今回はピアーズの佐藤が県警と協力して大学で何かやれないかということで、大学が全面的に協力しようということになりました。今私の脇にいるのが関東1部リーグにも入った卓球部の佐藤君ですが、卓球部の協力も得て、あと私は専門が心理学ですので、簡単な心理検査をちょっと体験してみようとか、いろいろな部署と協力しながら佐藤が中心になって実施したのが今回のピアーズの活動です。今後も学生の創意に基づいて活動をいろいろ展開していきたいと考えています。回答にな

ったかどうか分かりませんが。

野口 ありがとうございます。今、支援がある・ないにかかわらず、皆さん活動していらっしゃるのですが、どういうことがあればもっとこの活動がうまくいくか、大学がどういう対応をしているか、支援する、あまり勧めない、支援もしないし邪魔もしないなど、いろいろあると思いますので、その辺りを後半に話しあいたいと思います。ありがとうございました。

それでは前半を終わらして、10分間休憩をして次に移りたいと思います。前半、非常に良い発表をしていただきました。皆さまありがとうございました。



「少年警察ボランティアに参加する意義」 ～大学生として、今、何ができるか～



野口 それでは第2部を始めます。先ほどは十分に時間があつたでしょうか、それぞれの活動内容をお話いただきました。いろいろ苦勞があつたことと思います。まず、活動する上で大変だつたこと、やっている最中に追い風が吹いたか、向かい風が吹いたか、活動を促進している要因と阻害した要因、何か新しいことをはじめたときの抵抗など、その辺の苦勞話みたいなものを伺えますか。一人ずつ3分ぐらいで順番をお願いします。

■困つたこと、びっくりしたこと

貝和 苦勞したというか、初めて見てびっくりしたという体験になるのですが、去年のクリスマス近くにカラオケ店で街頭補導をしていたのですが、自分が入つたところにいた二十歳未満の子どもがたばこを持っていて実際

に補導対象になりました。今まで街頭補導といつてもそういうのは目のあたりにはしたことがなかつたので、そういう子どももいるし、何でそういうことをやつたのかとそのとき一緒にいた警察の職員がしっかりヒアリングをしていて、背景とかそういうところからまたばこを吸つてしまつたとか、そういうところでいろいろ考えさせられることが多かつたです。

野口 うちの大学生もびっくりしていました。実際に、「あ、捕まつた」という感じのそのときの少年の顔、初犯の人、何度も捕まつて照れ笑いをしている人などいろいろあつて、そういうのを見ながら、学生は、次はどういうふうに対応していこうかなというところに向かつてはいくのですが、最初はびっくりしたということです。ありがとうございます。

鈴木 大変だつたことというよりは、少し困

ったなということがあったのですが、農業体験でジャガイモを採ったりしているときに、ただの作業になっているなというのがありました。あくまで個々の作業になっていて、私は積極的に話し掛けようと思って農業に関することであったり、普段どういう生活しているの？とか、何げない会話をしたのですが、全部が全部答えてくれるわけではなくて、普通に黙り込んで黙々と作業をしている子もいました。

そうなったときに、あまりにもこちらから質問攻めをしていると逆にコミュニケーションになっていない、レポート、信頼関係が取れていないというのがあって、一つは相手からの動作、言葉が出てくるのを待つということも大切だなと思っていて、ある程度少年の行動やどういふ少年なんだろうというのを観察する力も必要なのだなというのを学びました。

野口 とても大事なお話だったと思います。私も最初のころは草取りをやって、一緒に行動をするということで、最初は話しかけるよりは行動で沿っていききました。そのうちに何となく、虫がいたとか話が出てきて、次第に話ができるようになったということ、今思い出しました。関わり方って大事ですね。ありがとうございます。

青山 私が困ったことは、以前街頭補導活動をしていた際に、ゲームセンターの地下に喫煙場所があって、そこで対象者が2名でたばこを吸っていました。男性はスーツ姿、女性はドレスのようなどう見ても二十歳以上に見えるような風貌をしていたのですが、どこかおかしい部分があって声を掛けました。おかしい部分というのは、顔が幼くて、風貌に合っていない。声を掛けてみると、男性は19歳、女性は17歳で、カップルで今遊んでいるという話をしている、非行というか、まだ非行に走っていない少年も大人をだます能力にたけているというのを身をもって感じるがありました。

そういった子どもたちから情報を聞き出すのですが、普通に会話していてもなかなか聞き出すことができなくて、最初私はそういった子どもたちと対応するときには、対等に話したいと思い敬語を使って話をするように心掛けていたのですが、それだとかえって子どもたちが萎縮してしまっていて聞き出したい情報も聞き出せずにいました。そこで、一緒に活動している警察官の補導する姿を参考にしました。警察官は少年に対してフレンドリーに話し掛けていました。友達ではないですが、ソフトな声掛けをすることで青少年の心を開いていき、聞き出したい情報を聞き出す、そういったことを学ぶことができました。

野口 それでまた思い出したのですが、うちの学生が最初に実習した時に、「自分たちは着ているものとか表面的なもので年齢をごまかされてしまう。でも、ベテランの補導員や警察官はどこを見るかということ、襟足や爪を見るんですよ」と言っていました。そういう年齢をあまり隠せないものを見て、その辺りで年を偽っている場合はわかるそうです。初めはどうやっていいかわからないけれども、そういうことを学びますよね。いろいろご苦労があったと思います。敬語を使っていいものか、ざっくばらんに言ったほうがいいのかとか、多分最初は皆さん同じように戸惑いながら進めてきたのだと思います。よくわかります。

佐藤 私が大変だなというか思い出するのは、私はこのボランティアのほかに2年目になるのですが児童養護施設で学習ボランティアもしていて、そこでの経験があったので、この少年の非行防止ボランティアでの児童養護施設での和菓子づくり体験もその経験を基にできるかなという気持ちで行ったのですが、児童養護施設ごとに子どもの雰囲気は全然違って、私が予想していた少年たちの雰囲気ではなかったのに衝撃を受けました。話し掛けても全然返答がないとか、一言一言にチクッというどげのある発言があったりとかいうのを

和菓子づくりの間に感じるがありました。実際そういう体験をしながら私自身が一方の児童養護施設の固定観念を持ってそこに行ってしまった、ある意味型にはめていたのだなというのを痛烈に感じた瞬間でした。そういう体験が自分の中で大変だったことです。

野口 ありがとうございます。得るものがあったのですね。反省もありますか。

佐藤 もちろんありました。子どもたちが何でチクッという言葉を書いてしまうのかなとか、例えば私が「すごいね、上手にできるね」と和菓子づくりをしている子どもたちに言うと、「私はできるよ」と言うんです。あなたはできないでしょ、みたいな感じに話してくるのですが、本当はもっといっぱい褒めてほしいのかなとか、そういうことを子どもたちと関わっていく中で感じました。

野口 ありがとうございます。

白木 私が活動していて大変だったことは、ボランティア活動の前の段階だと思いますが、大学との連携です。小学校・中学校の生徒を相手に活動しているので平日がベストなのですが、自分にも授業があるので、今は何とか時間を見つけて、昼休みにご飯を食べずにそのまま活動場所に行ったりしています。自分がいる学科を例に言うと、自分は心理学科なのですが、救急救命分野で救急救命士を目指しているクラスにいます。そこでは医療系の授業が多くて、5時間5コマで3単位など単位を取るのが大変で、ボランティア活動に専念できないという現状があります。なので、いろいろな人を誘いたくても今は誘えないということで、かなり困っています。

自分は活動したいので、何とか頑張って活動をして、小学生に「また来てね」、「楽しかったよ」とか、中学生に「お姉さんすごいね」と言われるとすごくうれしくなるので、これからも自分でなるべく時間を見つけて頑張っていきたいと思っています。

野口 ありがとうございます。

杉浦 私が大変だったことは、最初の農業体

験でした。水菜を採ったのですが、そのとき担当した女の子が中学2年生と1年生で、男性なら話題を見つけやすいのですが、女性となると難しい部分があったのを覚えています。実際その活動でも全く話せなくて大変でした。その後は家でも反省しながら過ごしていて、その後コミュニケーション能力が自分は低いなと思って、本を読んだりインターネットで調べたりして勉強して改善するようにしました。大変だったことは最初の農業体験で、得たことはコミュニケーション能力であると思っています。

質疑応答

野口 ありがとうございます。皆さんいろいろなところで苦労しながら大事な活動をしていただいていることがよく分かりました。今、大変なことがいろいろ並びましたが、今回は、せっかく活動してくれる学生の活動を、個人的にはやりがいがあるにしても、もうちょっと、やりやすくするためにどういう支援ができるかを考えなければならないと思います。前半で先生に伺ったところでは、心理学の先生がいろいろ提案したり見守ってくださっていることがわかりましたが、フロアからも関連のところでも伺ってみたいと思います。

まず、今まで発表してくださったことについて質問はありますか？ 先ほど気が付いたのですが、愛知県の浅井さん、警察と学校との間でいろいろご苦労というか考えてくださっているというお話を聞きましたので、どのようにやっていらっしゃるか、準備の時間もなくて申し訳ありませんが、何かお話ししていただけますか。

■警察と学校との間で

浅井 私は教育委員会から派遣された現役の高校の教員です。期限は2年間なので来年の3月まで本部にいて、4月から現場に戻るのですが、学校現場にいたときは生徒指導の中

心に仕事をしていました。今主にやっていることは立ち直り支援です。学校現場にいたときも両親に捨てられて施設から通っていた子やかなり横着もしていた子もいて、とにかく基本は子どもとどれだけ関わられるか、どれだけ時間をかけて話をしていくかということは経験済みでした。県警本部で私が担当してやっているのは農業体験、学習支援、スポーツ教室で、子どもといかに会話をして、今回活動に来て次回も来るとは限らないので、その場限り、一発勝負だと自分自身は思いながら、限られた時間、できるだけ子どもと接するように私もしていますし、大学生にもお願いしています。

過去に困難校で働いたこともあるのですが、子どもにあることを言われました。それは何かというと、「何で先生はそんなに俺に向かってけんかしてくるんだ」。「何でだ」と聞くと、「自分は今まで小中で先生に声を掛けられたことがない。ごみ扱いされてきた。だけど高校に来て、こんな俺に真剣に怒ってくれる」と言われたときに、自分もその子に気付かされたのですが、家庭の教育力が低い場合には、その子に関わる周りの大人が、その子が一人前にやっていけるように、いいことはいい、悪いことは悪いということをしっかり教えていってあげる。

自分の教え子でもオール1で高校に入ってきて、週末は外でけんかをして帰ってきて、あるときは傘の先で目をつつかれて目の周りを真っ赤にして、失明するぞと会話をしたこともあるのですが、その子は今社長をしています。就職先を見つけるのも大変だったのですが、最初建築関係に入れてもらって、数年で独立をして今社長をしています。従業員はどうしているのかと聞くと、ある意味立ち直り活動をしていまして、市内の中卒で遊んでいる子たちを全部かき集めて従業員にしている。

今自分が関わっている子たちも、最終的には一人で生きていかなければいけないですか

ら、いろいろな体験を通じてとにかく会話かなと思って、うっとうしがられようがとにかく会話、まずあいさつから言って、あと会話。そうすると子どもはだんだん変化してくるものなので、今年は大学生を31名委嘱していますが、そういったことも大学生にも気付いてもらって。教員になる子が多いですし、今日発表してくれた杉浦君は警察官に受かっていますので、来年からは警察官として働いてもらうのですが、そういった声掛けを勉強していってもらえればいいのかという思いで今仕事をさせてもらっています。

野口 ありがとうございます。ほかにご意見ありますか。もしなければ、もうお一方。先ほど伺ったのですが、岐阜県の警察本部で、学校との関係を今一生懸命形づくろうとして努力をされているお話がありましたので、その辺を伺いたいと思います。

■教育委員会と警察本部との交流

大和谷 今愛知県の方が話されましたが、岐阜県は今年から教育委員会と警察本部との交流が始まり、私も同じように警察で仕事をしています。今うちの白木さんが話をしてくれて、2点大きなことがあります。1点は、私どもは立ち直りと、もう一つ啓発活動、小学校や中学校に行つて、こういうことはいけない、こういうふうに育ってほしいと全体で話をする機会をできるだけたくさん設けていこうと考えています。

今日もそうですが、大学生がすごくいいことをやっていますし、これだけ大きな母体で動いています。これを現場の小学校や中学校の先生に伝えて行ける場所、それからこの子たちがこういうふうになっていますよとアピールする場所を何とか県内でつくってあげて進めていかないといけない。そのためには私どもとか先ほど話をされた愛知県の方とかが、何とかアピールする場所、話をする場所をということで、できるだけ教育委員会の校長会

の場面でこういう話をさせてもらったり、生徒主事会議のときに大学生がこうやって動いていますよ、こういう内容がありますよというのをアピールしていかなければいけないなど、私どもが踏まえて考えて今進んでいます。

野口 突然でしたのに、ご意見有難うございます。ほかに、似たような立場から、あるいは違う立場、反対のご意見でもいいのですが、学生がボランティア活動を学校の授業の単位としてではなくて行っている場合がございますか。フロアから、要望やご意見がありますか。理事長もいらっしゃいますし、全少協でもいろいろ効果的な取り組みをしていきたいと思っています。

20年近く続いてきて拡大していくボランティア活動というのは、やっているほうにも、もちろんその対象の人たちにも、いろいろな効果を与えてくれます。ボランティアということから考えると、とてもいい社会活動であり、何よりも大事だと私が考えるのは、共感性が育っていくことです。それを直接目的としているわけではないですが、活動をしているうちに共感性が大きくなっていくような活動だと思います。戦争とか経済とか政治とかの場では何かといろいろあっても、この世界ではみんなつながって助け合いができるのだというのがとても心温まる大事なことだと感じるのです。それを続けていくために、今回のシンポジウムの目的でもありますが、その成果を聞いてさらに発展させていくには何が必要なのか。学生に何ができるかということと、どういうことをしてほしいかということと、この先の課題にもしていきたいと思っています。もしありましたら気軽な感じでお話ししていただけますか。

大学の先生はほかにいらっしゃいますか。高校の先生、中学の先生、いらっしゃいませんか。はい、お願いします。どんなふうにして関わっていらっしゃるのでしょうか。

■ ボランティアをどう学校に取り入れるか

池田 私は石川県の金沢星稜大学の池田と申します。この会にはこれで4回参加しています。今回石川県は2大学がたまたま来ましたが、6名の発表を聞き、先ほどの原先生のお話を聞いて、大学の中では学生が主体であるのはもちろんですが、大学生はいろんな思いを持って、いろんな立場で、いろんなことに取り組んでいる、つまりいろんな可能性はあるのですが、それを継続させるためには学生がどう教職員を使うか。使うというのは言葉が悪いですが、先生たちは知りません、職員も知りません。先生たちはいろんな資質を持っています。学生の思いをどう学校にぶつけるか。

ありがたいことに、ここ数年間で各大学に地域連携センターやボランティアセンター、地域交流センターなどがどんどんできています。ほとんどの大学が10年以内です。ない大学はほとんどありません。今全国で約300万人の学生がいる中で、石川県も3万2000人、21大学あります。地域連携センター・交流センターは学生の社会貢献活動を促進するためにつくられています。

先ほど正課の科目と言われましたが、私も野外教育とかボランティア学の科目を持っています。ただ、ボランティアをしたら単位を出しますよというのはいろんな議論がありますし、私はちょっと違うと思っています。ボランティアに関していろんな考え方があると思いますが、ボランティアは「volo」というラテン語から来ているのですが、英語で言うと「will」です。つまり、誰かのために何かをするというわけではありません。皆さんが人間として何をしたいのか、その自分の気持ちの方向性を一歩踏み出すのがボランティアだと思います。そういう意味では、森田さんの『これがボランティアだ!』という本の中で、「人はなぜボランティアをするのか、それは人間だから」という言葉を書いています。

そのとおりだろうと思います。

「志」という言葉があります。これは心のある方向性に向かわせるという意味です。私たちも、学生も、警察の人も、たまたま非行に走ってしまった子どもたちも一人一人全部心を持っているので、それをお互いにどう察するか。それを、何かさせるのではなく、登壇された方が言ったように、共感して、歩み寄って一緒に歩き合う。それをまさしく制度化するのが教育委員会と警察とのバックアップとか、あるいは先ほど言ったような大学の施設をどう活用するかということだと思います。そういう意味では、基本的に大学をどう巻き込むかが一つの大きなポイントになります。そのためには、学生はなかなか先生に話すわけにはいきません。先生といっても、私は学部長とか学長もやってきたので学部室にいたので動きやすいですが、年齢とか立場によって一般の先生はそういうわけにはいけません。けれども、学生の気持ちと活動に大学は折れます。それは事実です。ぜひ警察関係の人とか県の人とか福祉関係とか、外部の人から学生の思いを形にして、連動した形で各大学の学長とか上のほうを動かしてください。これが一つ。

それと、学生ボランティアのOBの人たち、今ここに6人いますが、おとしし発表した学生は現職の警察官をやっています。同期が警視庁の立川署にもいますし、消防員にもなっています。つまり、ここにいる皆さんがこれから卒業して社会に出たときに縁を切らずに、OB・OGの人たちと現職の人たちとここにはいない多くの学生とをどうつなぐかという仕組みを、ぜひボランティア協会でも提案していただければと思います。大きな話を言ってしまっても構いません。

野口 大きいというか、そうなりたい話ですね。感動しました。学生の力で大学を動かすというのも目標ですね。学生と同時に、これは全少協のほうの話でもあると思いますが、希望も湧きますよね。支援もある程度やりや

すい環境という意味で、別に単位を欲しいとかそういう意味ではなくて、やりやすい感じで。もちろん、単位を出している大学もありますが、ボランティアの精神は自発的にやるということが基本です。

昔から、ボランティアは自発的にやるものであって、人のためにやるものであって、お金をもらわない無償という古典的な意味がありましたが、今、それが自分のためにもなっているという感覚がでてきていますね。発表にもあったように、自分自身が自己実現をする場にもなるし、自分の価値もわかる、自分の力の足りないところもわかるような、そういう場面となっているのです。また、少年警察というものが正規の補導員から見ると足りない部分を補ってくれる補完的な意味もあります。学生のボランティアという立場の関りでも、先駆けていろいろなことを考えて、スポーツと一緒にやろうとか農業体験やろうかと、どんどん活動も増えてくる。そういう意味では、ボランティア、ボランティアの含む内容・意義を全部少年警察ボランティアの学生の活動に当てはまっているという気がしています。本当に良い活動が広まってくれました。ますますの発展を祈っています。

時間が迫ってきましたが、皆さんからあと一言。自分のためにもなると言いましたが、皆さんどうでしょう。学生の立場で、自分より何歳か下の人たちと一緒に過ごしてその人たちの気持ちに添っていくという、活動はそうなのですが、それによって自分が成長したと実感したときがあったと思います。いかがですか。この活動によって自分自身のためにもなったなということはありませんか。

■自分が成長したと実感

杉浦 成長を実感したのは、先ほどの話の続きになりますが、最初は話せなかったのですが、今ではどんな子どもでも何の不自由もなく話すことができる。子どもだけではなく大

人も同じで、どんな人でも今では話せるようになりました。

野口 コミュニケーション力が伸びた。

杉浦 はい、そうです。

白木 小学生や中学生の情報モラル教室を開いている中でのやりとりで、自分は情報モラル教室を開くまでは、自分より下の人たちというのは、携帯とかであってもまだ何も知らないただの子どもじゃないかという漠然としたイメージがあったのですが、実際行ってみると自分より知っていて、しかも今はプログラミングなども小学校の授業に導入されたり、自分たちのほうが置いていかれているなどというのを実感しました。

自分の成長を実感という面では、今までそういう被害というか、50万使っちゃったとか、そういうことに全然関わりがなかったのが、そういう一部を知れたということが自分にとって、こういうこともあるんだなと知る成長になったかなと思います。

佐藤 先ほどの話の中でも述べたのですが、私は子どもたちと関わる時は、子どもたちに「大学生って楽しそうだな」と思ってもらうことを大事に、楽しそうにボランティアをしていました。それを見て少年たちがどうなりたいかというのを考えてほしいと思ってやっていたのですが、それが自分がどういう人に思われたいか、どうなっていきたいかをあらためて考えるきっかけとなって、それを考えた上で自分がこう見られたいとか、こうしていきたいと思うことにつながったことがボランティアの中で成長できたなということだと思います。

青山 私が少年警察のボランティア活動をする上で青少年と接するとき心掛けていることがあるのですが、相手の心情心理を十分理解して、思いやりをもって寄り添うことが重要だと考えています。そういったことを踏まえて、ボランティア活動を始める以前より相手の立場に立って物事を考えることができる人間に成長できたと感じています。

鈴木 ボランティアに関しては、学習支援においてストレートにこれはこうだよと伝えるだけでは相手は理解してくれなくて、時には私が例示してあげたり、アプローチの仕方を変えてみて、こういう考え方もあるのではないかな、このときはこうなるんじゃないかなという考え方の角度を変えることによって相手に伝わるということがあるので、参加の動機を話したのですが、物事を多面的・多角的に考えるという点では自分は成長できたのではないかと考えています。

貝和 自分がボランティアをやる前、大学生になったときはあまりボランティアとかは考えたことがなくて、成り行きで始めてみて、実際子どもたちと話していく中で「なりたいものになったほうがいいよ」と言っていたのですが、自分自身がなりたいものが特にありませんでした。このボランティアをやるのが自分にとって大きな挑戦だったのかなと思って、そのボランティアを通して、自分は今までずっと宮城県で暮らしていたのですが、来年から別のところに行くことに、新しいステップになったようにも思えたので、ボランティアを通して人前で話せるようになったこととか、いろいろ成長できたのかなとあらためて思いました。

野口 ありがとうございます。それぞれ皆さん控えめに語っていますが、こういう活動を通して社会に出ている人は多いです。頑張ってもらいたいと思います。

原さんはいかがですか。何か感想をうかがえますか。

原 皆さん動機もさまざまだと思いますが、一生懸命関わってくれていて、話を聞いていて、まとめ方も上手で、どんな活動をしていて、自分はどんなことを得たということがすごく分かりやすく発表してもらえたのは、皆さんが自分のボランティア活動に対する思いとか、自分がこれからどうなっていきたいかについてすごく明確に持って取り組んでいるのだなと大変心強く思いました。こういう若

い人がたくさんいることで、これからも大丈夫だなと思い、話を聞いていて私もすごくエネルギーをもらえたなと思います。感謝します。ありがとうございました。

野口 今日は学生ボランティア活動が発展しているな、学生の力ってすごいなと再認識できてとてもうれしかったです。昔は、時々危ないことなどもありました。補導をしているときに、大人が出て行って止めないと聞き過ぎてしまったり、言い過ぎてしまって、相手に体を使って反論されたりということもありました。学生だからこそできる、年齢が近いからこそ相手も心を開くということがいっぱいあると思いますので、気をつけながら、徐々に体験を積み、よりよい形をつくって今後とも活動を続けていただきたいと思います。フロアの皆さんも今日はいろいろ心に感じたことがあると思いますので、ぜひ少年警察ボランティアは大事な活動だと思って続けていただきたいと思います。

そろそろまとめの時間になっていますが、フロアの方、よろしいですか。この際こんなことも言ってみたいとか、感想でもいいのですが、こういうまとめ方ではなくて、別な方向にいきかかったとか、まだ修正可能ですが、いかがですか。よろしいですか。

今日は福祉、心理学、法学、人間科学、人間社会学、人間関係学、などの分野から6人のパネリストに、集まっています。いろいろな分野でもって支援できるということです。理工系の人にもこれからどんどん入っていただけるとよいと思います。人間の心に触れ、成長していける活動、そんなふうに考えています。

先ほどの話の中で関心を持ったことを一つ。ファッションという外見から変えていくということを試みたというのがありました。髪を元に戻して普通の人みたいにしたら、だんだん行動も普通になっていくというお話でしたよね。私は、退職前に、今までファッションに関する学部がある大学にいまして、「ファッ

ションによって外見が変われば心も変わるか、あるいは、心が変わればファッションも変わるか」というテーマで研究しておりました。4～5年目に入ると、だんだんそういうことがあり得るだろう結果を得ています。

また、自分が引っ込んでいて、人に無視をされていて、存在も認められないというので話もできなくなった人が、今はやりのファッションを着ることによって人から声を掛けられるようになり、それから話ができるようになったという逆バージョンもあります。内側から変わるチェンジマイセルフも、環境を変えることも、外側を変えることもいいし、いろいろな方法がありますね。

それから、少年たちと何を一緒にやるかということでは、楽器、ハンドベルの話がありました。ハンドベルを一緒にやって音を出しているうちに、音によってもいい気持ちになるし、一緒に作業をやって間違えずに心を合わせていることの効果も出てくる。そうすると、音楽を弾ける学生も一緒に非行少年とそういう回復の機会を持つようになっていったら、それもいいかなと。今いろいろ伺いながら、いろいろな人が持っているものをそのまま使いながら支援ができるようなことがもっと考えられるのではないかと思います。フルートでもいいし、ピアノは場所が大きいですから、一番いいのは歌ですね、持ち運びができますから。歌を一緒に歌うということで心と心がつながります。

農業体験の草抜きなどの一緒に作業をするということで心を通わせるということでしたが、音楽も非常に心和ませます。非行少年であっても、小さいときに子守歌を聞いたでしょうし、童謡を歌ったかもしれないという人たちが、そういうものを一つの道具にして、心を通じ合わせることもできるかなと。今日のお話からいろいろなことが浮かびます。

人の役に立ちたいという思いで始めたことが、自分のためにもなっているということもよくわかりましたし、まだまだ活動の範囲が、

広さとか深さが広がっていくということもわかりました。今日は、今までなかった提案で、全少協はこれから大学にも働き掛けをして、どうしたら少年補導に関わるボランティアの学生たちがやりやすくなるかということも考えていただく。それが一つの大きなうねりようになって、全国的にもっと広がり大きな力になっていくといい、皆さんの活動もその芽生えの一つとなって、それがどんどん木が大きくなるように育っていけばよいと思っています。

各地域の方がいらしていますが、お願いしてもよろしいですか。代表の方に伺ってよろしいでしょうか。富山県の方、いらっしゃいますか。富山県の先生、お願いします。

■なぜあえてボランティアをするのか

隅田 高岡法科大学という富山県の大学から来ています。学生もちろんいますが、私は教員の隅田と申します。高岡法科大学では社会安全ボランティア部というサークルがあります。少年警察学生ボランティアと交通安全学生ボランティア、それから県庁の学生防犯ボランティアの三つを別々にやっていたのですが、メンバーが重なったというのもあって6年前に三つ一緒にして、主に警察関係のボランティアをやっているサークルの私は顧問をしています。農業体験の話とか街頭補導の話とか中身の話はいろいろ得るものがあったり勉強になったのですが、皆さんのボランティアとしての関わりというのを聞いてみたくて。なぜならば、学生は学業が中心で、就職活動もあって、ほかのサークルをやっている人もいますし、自分の趣味や娯楽もあるし、アルバイトもある。だけれども、ボランティアをあえてやるという選択、壇上にいらっしゃる皆さんは熱心だと思いますが、いろいろな人がいますし、自分もそうですが、ほかの周りの人にこうやったらボランティアにもっと参加できるのではないかと。

先ほど岐阜県の白木さんが言われていたが、大学との関係で、大学の単位が厳しいので自分はボランティアに専念したいけれども大変だとか、あるいは誘いたいけれども誘えないという話にすごく共感したのですが、ほかの人にもどうやったらもっとボランティアに参加してもらえるか。あるいは、自分自身がなぜほかのサークルでなく、趣味に時間を費やしたい、あるいはアルバイトをしたいのだけれども、ボランティアをやったのか。そういった選択についてお伺いしたいと思います。

野口 フロアの方全員にお聞きしたいのですが、今日は壇上の方々に代表で今のご質問に答えていただきたいと思います。

貝和 私の大学自体がボランティアに力を入れている大学で、その顧問の人と楽しくボランティアを通して信頼関係を築けたので、こうしていろいろなボランティアに参加できているのかなと。周りの人の支えみたいなのが強いのかなと思います。

鈴木 なぜボランティアをしているかということ、私はほかにも赤十字奉仕団に入って献血の推進をしたり、家庭裁判所での少年との関わりとかもしているのですが、結局は自己実現のため、自分の自己有用感を高めるためというのが一番かと思っていて、自分が誰かに必要とされている、誰かの役に立っているというのが人との関わりを高めていく、人間関係の構築にもつながるのではないかと。もあってボランティアを始めたというのがあります。

ほかの人にもボランティアを推進したいのですが、現実的に言えば、見返りを求めている人がすごく多いのではないかなと思っていて、ボランティアをやることによって何かあるのかとか、それをやってどうなるのかという素朴な疑問を持つ人が実際多くいるので、その人たちを説得するのは正直私も難しく、どうすればいいのか分からないのですが、少しでも誰かの役に立ちたいと思う人がいるの

であれば、いろんな人に参加してもらいたいと思っています。

青山 私が警察のボランティアを始めたきっかけは、パネルディスカッションの第1部でも述べましたが、将来警察官になりたいということで、学生の身分でありながら、警察官としての業務を体験できる、そういった部分に大変魅力を感じましたし、自分がボランティアに関わることで社会貢献につながるのではないかと思います、参加させてもらいました。

佐藤 私は大学に入った理由が犯罪心理を学びたいということで、犯罪する人は普段見えなかったりとか、中学生とか高校生とかに関わりたいたいというのがあったのですが、大学生になるとなかなか小学生や中学生、高校生と関わる機会がなくて、そうなってくると自分をどういう環境に置くかということが重要で、そうしたら先ほど言ったような児童養護施設のボランティアとか。ボランティアに参加するとそこにいろんな人が集まっていて、同じような気持ちでやっている人もいたりするので、そういう理由でやりたいと思って始めたのですが、いろんな人を誘うというのはやはり難しくて。でも、もしかしたら、全く興味がなくてもその場に身を置くということから1回は参加し、そこに何も得るものがないければそれまででしょうが、何となく参加してみてそこから面白いなとか思わなくても続けていくことで始まる何かがあるかもしれないので、その場に身を置けるような環境を大学がつくったりするのもいいのかなと思います。

白木 自分は防犯ボランティアのほかに町おこしボランティアである「夜空カフェ」というところと、学校でもサークルに二つ入っていて、どちらもボランティア活動に関するサークルです。自分はボランティアに対して新しいことができる場所、新しい出会いがある場所という捉え方があって、みんなに理解はされないのですが、皆さんが言われたとおり、見返りを求める人が多いというのですごく共

感がありました。学校側も履歴書に空欄をつくるなという呼び掛けで、ボランティアをやれとは言うのですが、協力はあまりない状態です。

あと、自分のクラスは救命ということもあって消防に行きたい人が多いので、警察ボランティアに誘っても「自分は消防だから」とか、ほかの町おこしボランティアとかに誘っても、「何でそんな将来に直接利益がない、関わりのないものをやらなければいけないのか」と言われるので、誘うというのはとても難しい問題だと思います。

杉浦 私がボランティアをやった理由は、シンプルに人に尽くすのが好きだからです。世間の皆さんが私みたいに人に尽くすのが好きであるのならばボランティアをやりますが、そうもいかないので、それが一番問題かと思っています。どうしたらボランティアをする人が増えるのかという問題は、ボランティアの楽しさを知ればもっと増えていくのかなと思います。子どもたちが成長していく姿を間近で見られるのはこのボランティアの特徴でもあるので、そこを一度体験してくれば増えることにつながっていくのではないかと思います。

野口 今おっしゃったように、やる機会がなければ感想も出てこないですし、そういう意味では学校の中で座学も大事ですが、ボランティア活動という場をつくってあげるということもある程度必要なことだと思います。そこで何も感じないでやめていく人は、それは強要するわけにはいかないことです。でも、やってみてよかった、私でも役立つのだ、と試してみたり、相手からフィードバックをもらって、かえって自分が元気になり、支援に必要な技術を磨きだす学生もいました。科目の単位にするにはいろいろ議論があるかと思いますが、そういう場を教員なり職員が与えるというのも裾野を広げていくことのなるし、体験してもらおうという場をつくるのも良い結果が出てくるのではないかと思います。

そろそろ時間になりました。皆さま、ありがとうございました。いろいろ困難があっても乗り越えていけるということと、そういう力があることが今日はよく分かりました。学生を信じてより良い支援を考えていきたいと

思います。また次回につなげることとし、本日は、これで終わらせていただきます。

パネリストの皆さま、ありがとうございました。会場の皆さまも長い間どうもありがとうございました。

公益財団法人全国防犯協会連合会

専務理事 田中 法昌氏



聴衆の皆さん、午後の長い間お疲れさまでした。スピーカーの皆さま、東京に来ていただきましてありがとうございます。

さて、ボランティア、特に防犯ボランティアをやる人は全国でたくさんいらっしゃり、青色パトカーや徒歩のパトロールなど、さまざまな形で防犯に努力されています。その中でも少年対象のボランティアは非常に重要です。どんな犯罪者も子どもであった時代があるわけですから、子どものときに立ち直り支援がうまくいけば、大人になって犯罪をする人は減るわけです。今いろいろ問題になっている児童虐待も、児童虐待をする人の多くが、少年時に自分も虐待をされているわけです。自分が虐待された時点で何とか立ち直りをさせていれば、その後の悲劇も防げたはずであるということで、そういう面で皆さんの活動というのは極めて有意義な活動だと思います。

ところで、私が、今危惧していることについてお話ししたいと思います。最初に警察庁の少年課長も言っていました、少年の非行は6分の1になりました。全犯罪で言っても3割程度に減少して、今年も大幅に減っていますから恐らくピーク時の4分の1になるだろうと思います。犯罪は非常に減っていて、非行少年も激減しています。大変良いことです。しかし、一方でサイバー世界の中で問題が生じていると思います。

私が仕事上やむなく携帯を持たされたのは25年ぐらい前のことです。パソコンが普及したのはWindows95以降ですから、これも25年ぐらいにしかならないわけです。パソコンによってさまざまな検索ができる、携帯によ

ってメールができるということで、世界と簡単につながるできるようになりました。このパソコンと電話という二つがばらばらだった間は、それほど問題は生じなかった。

問題はこの二つが一緒になったことです。特にiPhoneなどのスマートフォンができて以降です。ほんの10年足らずの話です。今や、5割ぐらいの小学生が持っており、10年前とは全く状況が変わってきているわけです。

今は家の固定電話がありませんから、少年・少女が小学校1年から携帯を持っている。その携帯は高性能で、いろいろな形で人とつながることができるコンピューターであり、これを常時持っている状況なのです。子どもが高性能のスポーツカーを運転しているような状況になっているのです。少年非行の激減の背景にはこういう状況があるのではないかと。つまり、リアルワールドの非行がサイバーワールドに移転しただけではないかという気もするわけです。

皆さんより年上の人たち、つまり今の社会人がこのような危険な状況を改善しようと頑張っているのですが、小学生、中学生から慣れ親しんでいた人には技術的に劣るわけです。これから社会人になる皆さんであれば、少し努力すれば今の子どもたちを指導すること、すなわちサイバー補導がうまくできると思います。

皆さんの力、今日の熱意・熱気をぜひそちらのほうにも発揮していただくことをお願いしまして私のあいさつとします。これからもどうぞよろしくお願ひします。

閉会あいさつ

公益社団法人全国少年警察ボランティア協会副理事長
東京少年補導員連絡協議会会長

関口 充氏



ただ今ご紹介いただきました公益社団法人全国少年警察ボランティア協会副理事長の関口です。簡単ではございますが、閉会のごあいさつを申し上げます。

全国少年警察ボランティア協会では、大学生ボランティアの意識を深め、連帯意識を高めるなどの目的のために合同研修会を東西に分けて毎年度実施しています。今年度は東日本の研修会ということで北海道地区から中部地区までの学生、教職員、警察関係職員の皆さまにお集まりいただきました。

本日の研修会は、最初に警視庁生活安全部少年育成課主査、原俊明様より基調講演をいただき、都道府県を代表した6名の学生ボランティアの方々がパネリストとなって野口京子先生のコーディネートによってパネルディスカッションを行っていただきました。ご講演およびパネルディスカッションでご登壇いただきました皆さま、大変お疲れさまでした。

そして会場の皆さま、大変長い時間ご聴講をありがとうございました。私どもと致しましては、本日の研修が皆さまの今後のご活躍にお役に立てればと願う次第です。

本日の研修会の内容は「全国少年警察ボランティア研修会報告書」という冊子にまとめ、都道府県少年警察ボランティア協会などに届け、関係機関に献本などをしますので、ご覧になっていただく機会がありましたら、ぜひご覧いただきますようお願いいたします。

私ども全国少年警察ボランティア協会では、今後とも少年警察ボランティアの皆さまの活動に資する研修およびパネルディスカッションなどを実施していきます。皆さまのご協力・ご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。簡単ではございますが、本日お集まりの皆さまのご健勝とご活躍を祈念しまして、私のあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

全国少年警察学生ボランティア研修会アンケート調査結果一覧
【北海道～中部地区】

実施日 令和元年9月5日(木)

・ 参加学生数 82名 アンケート提出者数 76名
(回収率92. 6%)

・ (%)はアンケート提出者76名に対する割合

質問 1

1-1 講演のテーマや講師について

	質問内容	回答数	(%)
1	実際の現場で働いている方の話を聞いて、説得力があり、大変参考になった。	26	34.2%
2	経験による具体的な事例から少年達の事情(犯罪を起こす理由等)を知ることができた。	16	21.1%
3	少年達との関わり方について、相手の立場になって話を聞くことの重要性を学ぶことができた。	15	19.7%
4	学生ボランティアの心構えを学ぶことができた。	8	10.5%
5	無回答	11	14.5%

1-2 ディスカッションのテーマやパネリストについて

	質問内容	回答数	(%)
1	他の大学の取り組みや県の取り組みについて知ることができて良かった。	30	39.5%
2	とてもわかりやすく、素晴らしい内容ばかりで、自分自身も考えさせられるパネルディスカッションだった。	18	23.7%
3	同じ大学生の活動を聞いて、考えさせられ、自分ももっといろいろな活動をしてみたいとなった。	4	5.3%
4	今後の活動への洞察が深まった。	3	3.9%
5	活動報告、感想のみで、テーマの結論が出ていないように思えた。もっとその人の気持ちや考え方の話を聞きたかった。	2	2.6%
6	大学と協力して支援を行った話を聞いて、大学生にしかできない方法で素晴らしいと思った。	1	1.3%
7	色々と考えて活動していると思った。特に埼玉県と岐阜県の活動はとても参考になり良かった。	1	1.3%
8	自分の大学では全く連携がないので、自分がつなぎ役となる必要があることを感じた。	1	1.3%
9	根本に立ち返ったテーマを受け、より一層自己啓発の意欲が高まった。	1	1.3%
10	無回答	15	19.7%

質問 2 実施の時期

質問内容	回答数	(%)
今回の時期で(9月上旬)でよい	71	93.4%
他の時期がよい	3	3.9%
無回答	2	2.6%

他の時期がよい主な理由

実習や就職活動と重なる。
9月は教育実習がある。
9月下旬だと参加しやすい。

質問 3 その他研修会についてご意見や要望

	質問内容	回答数	(%)
1	せっかく他の県の大学生が集まっているので、グループディスカッションがあるといいなと思った。	2	2.6%
2	質問したかったが、流れや時間の面からできなかつた。質疑応答の際、もっと学生に問いかける機会を増やして欲しい。	1	1.3%
3	昨年行われた西日本での研修内容も気になった。	1	1.3%
4	毎年、もっと多くの学生がこの研修を受けられるような機会があればいいなと思った。	1	1.3%
5	護身術的な研修会ももっと増やして欲しい。	1	1.3%
6	他都道県の学生と個別に意見交換会ができる機会があるといいなと思った。	1	1.3%
7	少年とのコミュニケーションの研修会があると良いと感じた。	1	1.3%
9	無回答(特になしを含む)。	68	89.5%

質問 4 少年警察学生ボランティアの存在を知ったきっかけ(2つ以内回答)

	質問内容	回答数	(%)
1	大学(授業・ゼミ・その他)の教官(教授)から聞いて	17	22.4%
2	大学の先輩・友人から誘われて	9	11.8%
3	大学内掲示板の案内・募集ポスターなどによって	23	30.3%
4	警察や警察職員から聞いて	18	23.7%
5	大学のクラブやサークルを通して	6	7.9%
6	少年警察ボランティアの働きかけで	8	10.5%
7	全国少年警察ボランティア協会のホームページを見て	3	3.9%
8	大学のボランティア登録をされていて紹介された	2	2.6%
9 他(その	警察のホームページを見て	3	3.9%
	友人・知人等の誘われて	3	3.9%

質問 5 少年警察学生ボランティア参加の動機(複数回答)

	質問内容	回答数	(%)
1	少年の非行防止や健全育成に興味があった。	37	48.7%
2	大学生として、社会貢献活動、ボランティア活動をしてみたかった。	37	48.7%
3	警察の仕事に興味があった。	34	44.7%
4	少年に関わる活動がしてみたかった。	30	39.5%
5	自身の進路選択に役に立つと思った。	21	27.6%
6	先輩・友人・警察職員・少年警察ボランティアから勧められた。	14	18.4%
7	大学(授業・ゼミ・その他)の教官等から勧められて。	7	9.2%
8	大学の授業、ゼミ等の一環として。	4	5.3%
9 (その他)	アルバイトで塾の講師をしており、少年と関わっているなのでここでの能力を健全育成として対応させていきたいと思ったから。	1	1.3%
	少年法等のゼミに入り、少年の健全育成を実際に行動として活かしたいと思ったから。	1	1.3%
	自分も不良行為等をしてしまおうかなと思ったことがあり、後悔したことがあったから。	1	1.3%

質問 6 少年警察学生ボランティアの経験年数

	質問内容	回答数	(%)
1	半年未満	27	35.5%
2	半年以上1年未満	13	17.1%
3	1年以上2年未満	21	27.6%
4	2年以上3年未満	7	9.2%
5	3年以上	7	9.2%
6	無回答	1	1.3%

質問 7 少年警察学生ボランティアとして、どんな活動をしたか(複数回答)

	質問内容	回答数	(%)
1	農業体験を通じた立ち直り支援活動	39	51.3%
2	街頭補導	32	42.1%
3	学習指導	28	36.8%
4	地域ふれあい活動(清掃活動・スポーツ活動・植樹活動・社会福祉活動など)	24	31.6%
5	少年相談	3	3.9%
6	インターネット利用によるサポート活動	6	7.9%
7 (その他)	防犯教室	5	6.6%
	キャンペーン等非行防止啓発活動	4	5.3%
	農業体験以外の立ち直り支援活動	3	3.9%
	児童養護施設等への訪問	3	3.9%
	情報モラル教室	1	1.3%
	研修会等への参加	1	1.3%
	職業体験	1	1.3%
8	無回答(委嘱期間が短く経験がないという理由の者も含む)	4	5.3%

質問 8 ボランティアを行うことで、大学から受けられる評価の有無

	質問内容	回答数	(%)
1	単位は与えられない	71	93%
2	単位が与えられる	2	3%
3	ゼミの中での活動として評価してもらえる。	1	1%
その他	大学から賞をもらったので、評価してくれていると思う。	1	1%
4	無回答	1	1%

質問 9 少年警察学生ボランティアとしてやってみたい活動(複数回答～順位をつけて)

活動内容	順位	1位	2位	3位
1	地域ふれあい活動(清掃活動・スポーツ活動・植樹活動・社会福祉活動など)	26	8	9
		34.2%	10.5%	11.8%
2	学習指導	18	9	8
		23.7%	11.8%	10.5%
3	街頭補導	10	7	5
		13.2%	9.2%	6.6%
4	少年相談	9	20	12
		11.8%	26.3%	15.8%
5	農業体験を通じた立ち直り支援活動	7	13	7
		9.2%	17.1%	9.2%
6	インターネット利用によるサポート活動	3	7	10
		3.9%	9.2%	13.2%
7	無回答	2	2	2
		2.6%	2.6%	2.6%

質問10 警察や府県の協会から受けた研修や指導内容(複数回答)

	質問内容	回答数	(%)
1	少年警察学生ボランティアとしての心構え	54	71.1%
2	少年非行の現状	37	48.7%
3	活動時の危険防止	21	27.6%
4	少年の特性や人権	19	25.0%
5	街頭補導要領	19	25.0%
6	その他()	0	0.0%
7	無回答(受けていないと答えた者を含む)	8	10.5%

質問11 受けてみたい研修や指導内容(複数回答)

	質 問 内 容	回答数	(%)
1	少年非行の現状(サイバー犯罪等)、少年の特性や人権、心構え	6	7.9%
2	児童養護施設・少年鑑別所等への施設訪問・見学	4	5.3%
3	街頭補導の実演習	4	5.3%
4	少年との関わり方(コミュニケーションの取り方)	3	3.9%
5	スポーツ等による交流・支援	3	3.9%
6	少年との対話要領	1	1.3%
7	大学生としてできること	1	1.3%
8	被災地での支援活動	1	1.3%
9	警察関係以外の関係機関や専門家の方と関わる機会	1	1.3%
10	少年相談要領	1	1.3%
11	無回答(特になし)	51	67.1%

質問12 少年警察学生ボランティアを経験して感じたこと、本当によかったこと。

	質 問 内 容	回答数	(%)
1	少年が心を開き、話してくれることが多くなってきた時、たくさんの笑顔が見れたことが嬉しかった。	12	15.8%
2	少年達と一緒に自分も成長することができた。今後に役立った。	11	14.5%
3	警察官の方とふれあえ、身近に感じるすることができた。多くの人と関わるすることができた。	9	11.8%
4	少年達との距離感や接し方を学ぶことができた。	4	5.3%
5	活動を通じて少年非行について多くのことを学べた。今後も少年の手助けをしたい。	4	5.3%
6	子供達の楽しんでいる姿を見て、自分たちの活動が子供たちのためになっていることが実感できた。	4	5.3%
7	話してみると普通の子が多かった。	3	3.9%
8	大学の座学だけでは学べないことをたくさん学べた。	2	2.6%
9	ルールを軽く考えていた少年に、その危険性を伝えることができた。学習支援で「勉強が楽しい」と伝えられた。	2	2.6%
10	ボランティアの経験は初めてだったので、新しいことに挑戦できて良かった。	1	1.3%
11	無回答(委嘱期間が短く「経験がない」「特になし」という理由で記載していない者を含む)。	24	31.6%

質問13 触れ合った少年たちを見て感じたこと

	質 問 内 容	回答数	(%)
1	色々と問題を抱えている子でも、皆一様に私たちと変わらない普通の優しい素直な子供たちであることがわかった。	36	47.4%
2	怒る大人には怯え、優しくしてくれる大人には従う態度が見られ、少年達の姿勢を考えさせられた。大人を頼りにしていないと感じた。	4	5.3%
3	最初に話しかけた時にはなかなか目を見て話してもらえることが少ないと感じ、反抗的だったが、最後は笑って話し合えた。	4	5.3%
4	農業体験等活動している最中、すごくキラキラしているということがいつも印象的だった。自分もうれしくなった。	3	3.9%
5	学習支援の際に、年相応の教養がない子が多いと感じた。	1	1.3%
6	自暴自棄になっている子がいると感じた。何か熱中できるもの、達成感等自信がつくことを見つければ楽になるのかなと思った。	1	1.3%
7	関わった少年達は「強さ」に執着していると感じた。	1	1.3%
8	自分の居場所や存在を表現する機会がないために、学校内での非行に走ると感じた。	1	1.3%
9	コミュニケーションをとるために様々なきっかけがあるといいと思った。	1	1.3%
10	無回答(委嘱期間が短く「経験がない」という理由で記載していない者を含む)。	24	31.6%

質問14 将来への志望は

	質 問 内 容	回答数	(%)
1	警察官や少年補導職員	33	43.4%
2	その他(会社員、自営業等)	14	18.4%
3	教員(幼稚園、小・中・高校)保育士	10	13.2%
4	子供に関われる仕事	8	10.5%
5	公務員(法務教官、刑務官、自衛官、家庭裁判所調査官等)	5	6.6%
6	臨床心理士・看護師(精神保健福祉士を含む)	5	6.6%
7	無回答(思案中、未定を含む。)	1	1.3%

質問15 警察や全国少年警察ボランティア協会への意見や要望、その他

	質 問 内 容	回答数	(%)
1	このような素晴らしい研修会に参加できてよかった。このような合同での研修会を今後も多くやって欲しい。	4	5.3%
2	野口先生がおっしゃった音楽は良いと思う。言葉にできないことも音楽なら伝えられることがあると思った。	1	1.3%
3	ボランティア活動に参加し始めて間がないため、経験は浅いが、今後積極的に参加していきたい。	1	1.3%
4	時間がとれず、これまでほとんど参加できてなかったが、今回参加して自分もなにがしかの形がかかりたいと思った。	1	1.3%
5	他県との交流の機会をもっとあってもいいと思う。	1	1.3%
6	研修会のあとに自由に交流の取れる時間(立食パーティー等)が欲しい。	1	1.3%
7	ボランティアのOB・OGの方との関りもあると活動がより広まるのではないかと思う。	1	1.3%
8	私の県は学生、少年とも数が少なく、活動の幅が広がらない。	1	1.3%
9	このような研修会に大学の関係者の方々も参加してもらえたら理解が得られ、大学を巻き込んだ活動つながると思う。	1	1.3%
10	無回答～(特になし)を含む。	64	84.2%

さしのげる 手のぬくもりを どの手にも

